

---

# 職業は盗賊、相棒は誰！？

直江 アキ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

職業は盗賊、相棒は誰！？

### 【Nコード】

N8969E

### 【作者名】

直江 アキ

### 【あらすじ】

夜霧の国トルディキアの空には《アカツキ》と銘打った盗賊が出る。お仕事遂行のために、王宮の《月の塔》を訪れた《アカツキ》のカルはそこにいるはずもない人物に出会って……それは一人と一匹の過去を探す運命 漆黒の翼を連れて、カルは夜を駆けていく！

## 1 塔の侵入者！？（前書き）

以前に一度発表したものを改稿しました。よろしく願います。

## 1・塔の侵入者！？

その身を我に委ねよ。

我はそれで安らかに眠る。

\* \* \* \*

東の果ての、峻烈な山々に囲まれた森深くに、女神を崇める国がかつて在った。漆黒の髪、漆黒の瞳、そして漆黒の肌をした夜を護る女神は善良な民を愛し、正しき方向へ導いたという。

百年程前の、まだ歴史では新しい事実だが 何が原因で彼の邦が消えたのかは永遠にわからない。

何故なら女神の愛した者は、もう誰一人この世に存在しないのだから。

\* \* \* \*

「君は運命を信じるか？」

突如、闇が話しかけてきた      それも脳天気とも云える程、明るい声で。

その声でカルは初めて闇の中の人影に気付き、愕然とした。声すらあげずに狼狽出来たのは、玄人としてのプライドに他ならない。彼女は入ってきた窓を背に、部屋の中にいた人物と向かい合っていた。

少ない光量だったが目を眇て相手を確認する。

容姿は、一言で言うなら端整だ。

月明かりがうつすらと反射する、腰を越える長さの宵闇の色をした艶のある髪。同じ色の瞳は聡明さを感じさせる深みを持つ。顔貌が彫刻のように整っておりともすれば繊細な美少女の印象を与えてしまいが、そのきりりとした眉や唇は意思の強さを表し、その人が彼女ではなく彼だと伝えていた。

服装はなんというか 適当である。

乾いて取り込んだ洗濯物を何も考えずに着込んだ、が近いかもしれない。その辺のものを手当たり次第に身に付けた、と云うか。よく見れば女物も混ざっているようだが、それら全て庶民の着る動きやすさを重視した類のものではなく、上質そうな貴族の服だ。何よりおかしいのは男のいる場所だろう。

ここは トルディキア王宮。侵入不可能と言われる絶対安全な《月の塔》の頂上階。

そんな『脳天気』で『端整』で『適当』な人物がいる場所ではない。

ついでに運命論を語る場所でもなかったはずだ。

と、以上の結果より問われたカルは結論を出した。

「あんた侵入者には見えないわね」

いるはずのない場所に確かに存在する男は笑う。

片頬に鷹ができて悪戯っ子の少年のようだ。

「私のことはどうだっていいよ。たまたまここにいただけだ。

だけど、この出会いを偶然で片付けるには惜しい気がしないか？」  
無造作に片足を投げ出して床に座り込む様さえ絵になるような、一種異様な緊張感を男はカルに与えて、惜しくない、とは言えなかった。その沈黙を一体どう受け取ったのか、彼は満足そうに笑みを浮かべる。

「そう、私たちが出会ったのは運命なんだ」

「……………は？」

間抜けな返答をしてカルは目を瞬かせた。そして次の瞬間、凍り付く。

「漆黒の豊かな巻き毛、それに闇の瞳、なるほど、確かに美しい。それにこの高い高い塔に侵入するなんてな　あなたがカルなんだろう？」

なんの気概もなく、ただ名前を呼ばれた。うつかりと返事をしてしまいそうなくらいに。

そもそも名前を知るはずがない。仕事先に知人がいた、など笑えない。

カルは最近、トルディキアの裏社会で噂の仕事屋だ。《アカツキ》と銘うっており、彼女にかかれば盗れないものはない、と有名である。

ただし高い場所限定ではあったが。

彼女は大方が幼い頃には憧れるであろう望みを叶えた、数少ない人間である。

空を　飛べるのだ。

自由に。

無論、本人に翼は生えていない。種を明かしてしまえば、ただ大鳥を相棒に連れていて、その背に乗ってどんな高い場所でも忍び込むだけだ。

だがその知名度に反して《アカツキ》の素性は一切不明。彼女と接触するにはまず仲介屋を通さなければならぬし、その仲介屋もまた簡単には接触出来ない。

つまり、彼女の容姿も名もまるではつきりしないのだ。

わかっていることはただひとつ　彼女は高い場所に忍び込む仕事を失敗しない、ということ。

それなのに。

何者なの？

男は微笑んだまま、カルを見つめている。

瞬間的に恐怖を感じ、一歩退いた。それでもどうにか視線だけで周りを見回す最後の余裕は残っている。

依頼品はどこにあるのか。指示に従いわざわざこんな場所にやって来て、何一つ盗って帰れないなど《アカツキ》の名折れである。

さつさと切り上げてしまいたい。そんな彼女の困惑を知ってか知らずか、男は煌めく緋色の宝石を掲げた。

「カルを狙った物はこれだろう？ こんな物、あげるから盗んで欲しいものがあるんだ」

シャラン、と繊細な音が闇夜に響く。

男の手には見事な額飾りがあった。

金鎖に親指の爪程の大きさの紅玉があしらわれたもの。

カルはそれを食い入るように見つめる。宝石に詳しいわけではないが、それが最高級の品であることはわかつていいる。何故ならあれが今回の依頼品だからだ。

「これ、欲しいだろう？ ただ君だって戦闘は好かないはずだ。こっちとしてもそれは避けたい」

だから取引だ、と断言されて絶句する。

確かにカルは、争うくらいなら逃げることを選択するたちだ。

そもそも報酬につられてしまったが、ニコは嫌がったのだ。今回の依頼を。それを強引に承諾させたのはカルである。自分の愚かさで状況に聞こえるように舌打ちするが、男の感情が揺れる気配はしない。

あれが手には入れば、気が乗らなかつた仕事は終わり。

つまり取引自体は悪くない提案である。

悪くないが、引き替えに盗んで欲しいものが、理念に反するもの

なら？ カルは即答を迷う。

闇の多い取引は避けたい。

仕事柄、ポーカーフェイスは得意だが、それでもこんな依頼、という取引は初めてだ。

男は口角をあげて、カルを見つめた。意地の悪い笑顔だ。端正な繊細さは成を潜め、かわりにしたたかさが浮かぶ。

「カルが取引に躊躇する気持ちもわかるけど、私が衛士を呼んだらどうなるかわかる、よな？」

笑んだまま、緩い脅し。

一度引き受けた仕事は絶対だ。捕まるわけにはいかない。

カルは落ちた。

揺れていた視線を止めて、男に突き刺さるような険しい目を向ける。

「何が欲しい？」

「……自由」

噛み合わない会話。

カルは軽く溜め息をついて、同じ質問を繰り返す。

「何が欲しいんだ？」

「自由だよ、だから。盗んで欲しいのは 私だ」

今度こそ完全にカルは頭をかかえた。



## 1・塔の侵入者！？（後書き）

### 「人物紹介」

ファイル1：カル

『アカツキ』を営む盗賊。主に高い場所に隠されたものを盗む。高所専門といっても過言ではない。

## 2・奇妙な取引！？

『俺を盗めたら、額飾りを渡す。期限は一週間後だ』

カルが馬鹿な取引をしてから一日がたった。

対して広くもない居間には不釣り合いな応接セットと長椅子が置かれている。ソファーに行儀悪く腰掛けたカルは深く溜め息をついて目を閉じた。

居間の他に寝室として使っているもう一部屋の二部屋がカルの城だ。トルディキアには住宅に適した平地が少ない。必然的に住居は縦に伸び、それは人口の多いここ王都では特に顕著だ。

カルの部屋もそんな集合住宅の一室だった。

「で、どうするんだ？」

たった一人の姿しかない部屋に声が響く。窓辺で羽を休めている大鳥が人の掌ほどもある嘴を動かしたところを見た者はいないかったが、確かに声はその方向から聞こえた。

カルはそれに驚くことなく、瞳も伏せたまま唸る。

「……ったく、やっかいなことになったぜえ？　今回はカルのチカラもあてには出来ねえだろ」

やはり、大鳥が　口を聞いた。

カルの能力。

それは動物と双方向で意思の疎通　会話が可能なのだ。

例えば、抜け道探しにネズミに協力を依頼したり、衛士の注意をそらす為に野犬に走ってもらったり。

そして、高い所には相棒の大鳥　名をニコという。

「おいおい、あと五日だぜえ？ 仕事の期限は守らにやならん」

額飾りを渡す日まであと五日。とゆうことは、男を盗む期限はあと四日。ぐずぐずしてはいられない。

あの男 自由を欲しているが、何者なのか。彼は『プロなら自力で調べてね』と言って何も教えてはくれなかった。『国宝級の額飾りをあげるんだから当然だろう』と、理由付きで。

そんなわけで、カルが今日の昼間、城に住む小動物達に聞いたところ、男の正体はすぐに判明した。

それは思わずカルが大声をあげる程の大物だった。

「現国王の異母弟い！！？」

（年は多分二十くらい離れてると思うけど……）

「なにそれ？ ってゆうか国王、弟なんていたんだ？」

（……ずっとあの塔の中にいる。危険だから、なんだって。昔、王様が閉じ込めたんだ。誰も来ないし誰も相手にしてない）

（お城の中にもあのひとのこと知らない人いっぱいいるよ。たった一人たまに会いにきた人がいるだけで……）

（とっても可哀想なひとなんだ）

ニコがその黒く優美な翼をばさりと広げる。

「冗談じゃねえよ。そんな危なげな仕事受けにやならんのかあ？ 要は王様に逆らうって訳だろ」

不満気に羽をはためかせれば、風が起こり埃がまっつて隅の方へ散っていく。ついでに小動物もたたらを踏んだ。

（可哀想。ずっと幽霊みたいにいないみたいにされてる。何年も一人きりなんだ）

（だから僕ら塔の動物に優しいのかもしれないね）

（……僕らからもお願いするよ。あのひとがいなくなるのはさみしいけど、でもあのひとを塔から出してあげて）

二匹の小動物は、小さな頭部をペコリペコリと下げ帰っていった。

「で、どうすんだよお？ おりゃあ知らねえぜ。下手に手出しして巻き込まれるのは勘弁だ。それに大国トルディキアに睨まれちゃ、な。探すのに苦労するぜえ」

ニコは 鳥のくせに 器用に溜め息をついた。だが、溜め息をつきたいのはカルも同じだ。

「どうしよ……」

頭を抱えたい気持ちでいっぱいだ。予定通りなら今頃依頼品を手にいれているはずだったのに。

「どうもこうもねえよ」

ニコのあまりにもあつさりとした物言いに、何かいい案がと、希望を見たカルは期待を込めて相棒を仰ぐ。

ニコはニヤリと笑った。鳥のくせに。

「どつちも断つちまえばいいんだよ。もうすぐ冬至もやってくるし、あの額飾りは忘れちまえ」

「……は？」

ニコの意図を理解するのにカルは若干の時間がかかった。

「そもそもよう、額飾りの依頼だっておかしかっただろ？ おりゃ、あの男は信用出来ねえよって言ったよな。カルがはやって受けちまつたけどよお 変だったろ？」

「確におかしかったけど。だけど、そんなこと出来るわけないよ。一度、承諾しちゃったんだもん……」

机に突っ伏して考えこむ。窓の外の霧が頭の中までかかったように良い案など浮かびやしない。冬至の近付くこの時期はいつもより悩みが増えるのでそのせいかもしれない、とちらりと考える。

いずれにせよ、王弟の持っていた額飾りを手に入れなければ仕事は失敗してしまう。

「だったらやるしかないんじゃないか？」

再び唸り出したカルの耳に力強いニコの声がした。

顔をあげると、ばさばさと大きな羽音をたてて机に乗った相棒の、

丸い闇色をした瞳と目が合う。

「カルの信条だろ？ 一度引き受けたら何があってもやりとげる。おりゃ、嫌だけんどな。信念は折っちゃダメだ」

その瞳は、一緒にやってやらあ、とカルに語りかけていた。

「さあ、カルは何を迷う？」

そうだ、何を迷う必要がある？ 自分は仕事を始める時に誓ったではないか。

何があるうと、目的を達成するまでは、あきらめないと。

「何も 迷わない。迷うことはない。何があるうと、やり遂げる」  
「それでこそカルだ」

満足気に頷いて、ニコは定位置に戻る。

それを見てから、カルは勢いよく立ち上がった。

「よしっ！」

つかつかと窓によると、遠くに霧で霞む微かな王宮が見えた。細く白い指でカルは《月の塔》を差す。

「奴を盗み出す！ 期限は四日 例え標的が雲の上にあるうとも、それが霧の中に消えていようと《アカツキ》に出来ないことなんてない」

ニコが最後に一言、おりゃ嫌だけどな、と呟いた。

## 2・奇妙な取引！？（後書き）

「人物紹介」

ファイル2：ニコ

盗賊『アカツキ』のもう一人。ただし人間ではなく種族は大烏。皮肉な口調だが、カルには優しい。

### 3・秘された力！？

「と、ゆうわけでニコ　今すぐ飛んで？」

定位置である窓辺の長椅子でまどろんでいた大鳥が小さく欠伸をして、眠たそうにカルを見る。

その仕草は実に人間臭い。

「どこへだよ？　おりや眠いよ」

「やあね、盗賊のくせに夜に弱いなんて……ほら、起きてよっ！  
用があるんだつてば」

昼間仕事にせいをだす盗賊もいないではないが、カル達はイメー  
ジ通りに夜が稼ぎ時間だ。  
アカツキ

この国は霧が発生しやすい。霧のお陰で夜間は、家々の灯りが幻想的で王都も立派な観光地だ。

そして霧のお陰で仕事もしやすいのだ。

「いくら霧が出てるっていつても、おりや目立つのは嫌いなんだよ」  
そんな大きな体で何を言う、とカルの視線が大鳥に向かう。視線に気付いたニコは咳払いした。

「……仕事じゃねえんだろ？」

「仕事の一貫。出して出して」

「乗り合い馬車じゃねえんだよ。ったく　で、どこ行くんのだ？」  
大きな翼で目を擦り、ニコは話しかけた。

「王宮」

ニコはいっぺんで目がさめたらしい。闇色の瞳がきらめく。  
「はあ？　いや、何のために？」

「依頼人ともう一度話をするの」

「依頼人と接触？ そんなの初めてだろ」

カルは燃えていた。

「取引を持ちかける程の奴だから何か考えがあるんじゃないかと思  
つて」

「で、俺を馬車がわりに王宮へ行つて聞いてこようってわけかあ？」

肯定のかわりに、ぶんぶんと首を縦にふる。長い黒髪が舞った。

「まあ、カルの頼みなら仕方ねえか。おりゃ、カルに甘いなあ」

「よろしく！」

「んじゃ支度しな」

カルの服は普段着だ。すみれ色の古ぼけたシャツに、くすんで汚れたズボン。さらに裸足である。

《アカツキ》の生活水準は意外に低い。二人の生活のスローガン

贅沢は敵だ。

ニコは一抱えもある鞆を嘴でカルにむかつて放った。

それらは、通常は天井の梁に隠してあるものでニコでないと取ることが難しい。中身は仕事道具である。万が一、ないと思うが万が一衛士が調べに来た時のために隠してあった。

闇夜に紛れる漆黒の衣装に、足音のしにくい素材で出来た黒のブーツ。滑り止めのついた黒い手袋はすでに手に馴染む。髪をまとめるリボンでさえ黒い。

一番底に入っていた、柄に緋色の輝石を埋め込んだ黒光りする護身用の短剣を腰のベルトにきゅっとはめて、いざ出陣である。

「行くよ！」

そう言つと、ニコの返事を待たずに勢いよく窓から飛び下りた。耳を切る風の音がしてすぐに暖かな背に着地、飛翔する。

一直線に、王宮の月の塔を目指して。



飛んで数分 聞こえてくるニコの声。

「俺の羽、湿ってきた……」

それはすねたような情けない声。

「しょうがないでしょ。トルディキアは霧けぶる幻想国、湿気はお友達なんだからっ！」

「俺の羽、痛むよう……」

相棒の泣き言は無視する。いつものことだ。

カルの肌もうつすらと水滴が浮く。仕事の衣装も湿っていた。だが、仕方がないし、いつものことだ。

「あと少しだから、がまんがまん！ 額飾りの報酬で乾燥剤買っただげるから」

何たって六百も貰えるんだから、とウキウキとカルは呟いた。心なしニコの首が下がる。

「……ふかふかのタオルも付けてくれよ」

「了解！」

さらに飛ぶこと数分。ようやく王宮の正門が見えてきた。

前回忍び込む前にネズミに聞いた見回りの交代時間まであと少し、どさくさに紛れて今日も侵入の予定だ。

「二分後……行くよ！」

「わかってらあ」

まかせろ、と言うようにニコは高く高く上昇する。雲近くまで昇り、王宮の深部へ移動。もうこの高さからは家々の灯りすら濃霧に巻かれる。

カルの黒髪がばさりと逆立ったのを合図に、突然ニコが滑空した。灯りが高速で近付いてくる。

きっかり二分後、カルは《月の塔》の最上階の窓枠に手をかけていた。腕の力を頼りに自分を塔の内側に引き上げる。

「こんばんわ」

部屋に向かって小さく声をかける。だが、当然ながら誰の返事も

ない。

「この階に住んでるわけじゃないとは思ってたけど……さてさて」  
カルは意識を集中した。

部屋の壁にその気配はあった。

ゆつくりと壁に近付き、驚かせないように囁く。

「ちよつと教えて、幽閉されている王弟はどこにいるの？」

壁の向こうで小動物が息をのむ、微かな気配がした。

「私はカル　お願い、教えて」

（……何の為にそれを知る？）

くぐもった小さな声なき声が返ってきた。

猜疑心の強い響き。

こんな時、協力者に嘘は許されない。例え相手は何者であろうとも。嘘は仕事に支障をきたす。

何よりカル達の掟だ。人間以外の動物に嘘はつかない、と決まっている。

だからカルは正直に伝えた。

「王弟を自由にするために」

壁の向こうにいる小動物は、その答えに満足したらしい。

（ではお前、いや、あなたが《アカツキ》か？　話は聞いている。詳しいことは我が孫に聞くといい）

それつきり、壁の向こうからは何の音沙汰もない。

「……孫はどうしたのよ」

カルが呟くと、足元でチュと小さな鳴き声がした。

（あのひとは五階にいます）

カルはしゃがみこみ、小動物　ネズミに手を差し出した。ネズ

ミは素直に手に乗る。

おかしなことに人間に慣れているかのようだ。

「あなたが孫？」

はつかねずみだ。真っ白であるはずの体は煤けて汚れていたが、

首を傾げるようにしてカルを見つめるその仕草は愛らしい。  
（そうです。ご案内します、あのひとのところまで……）  
カルは軽く頷き、ネズミを掌に乗せたまま中を見回した。

前は 恥ずかしながら そんな余裕はなかった。あの男のせいで。

薄暗い塔の内部は、とても宝物庫には見えない。なぜ、額飾りの依頼人はこの場所を指定したのだろう。  
不に落ちない。

何か思い違いをしている？

（……あの…… どうかしましたか？）

カルの手の中でネズミが心配そうに鼻をひくつかせていた。桃色の小さな手足がプルプルしている。

「何でもない…… 階段はあつちだよね？」

カルはその先に階段があるであろう扉を指差す。重厚な扉は見るからに重そうでうんざりする。ただ塔の登り降りには階段以外に道はない 筈だ。

（だめです。あそこは通れません。鍵がかかっているとかで……）

「じゃあ、窓の外から？」

カルは入ってきた入り口を指差した。

だが、ネズミは小さく首を振る。

（違います。隠し階段があるのです）

「隠し階段？ この塔、そんなものがあるの？」

（逃げ道の確保、とあのひとは言っていました。難しいことは私にはわかりません。すみません）

「別に謝る必要ないわよ。……それで、どこ？」

ネズミは鼻先で左の壁を示した。カルは素直にそれに従い、壁に寄る。だが、寄ってみてもそれはただの壁に見える。

（そこを押して下さい……）

ネズミは小さな前足で石壁を差した。

「そこってここ？」

なんの変哲もない壁　それをカルはそうつと押した。

ガチン。

何かがまわる本当に小さな、微かな音。

石壁の一部が内側に向かってスライドすると、細く隙間を見せた。それは人ひとり、やっと通るか、というぐらい狭い。

ぽっかりと開いた隙間の奥は真っ暗だ。暗すぎてネズミがあると言った階段は全く見えない。

隙間から顔だけで中を覗くが、どんなに視力がよくてもこの中では見ることが出来ないだろう。

国は今夜も濃霧で、窓の少ない塔内部も薄暗い。そんななか、さらに狭い隠し階段に光が届くはずもなかった。

「これじゃ、さすがの私も降りられないや」

不用意に足を踏み出すことほど危険なものはない。

基本的には慎重に調査してから仕事にとりかかる質だ。今回に関していえば、最初から後手にまわっているが、それは今回がのつぴきらない事情があった特殊な件であるせいもある。

仕方ない。

「中に入ったら火をつけるから、君は安全なとこにいて」

一歩、すり足で中に入る。階段がどこから始まっているかわからないためだ。

中に入ってみると意外に広い。一人なら十分通れる。

「これ、どうやって閉めるの？」

（……えつと、左の壁に仕掛けがあるはずです）

ネズミの言った通り、隙間の左の壁を順に押す。腰の辺りで、煉瓦が動く感触がし、急に暗くなった。

「わっ、びっくりした……すごいや、この仕掛け」

扉を閉めてしまうと、前も後も、掲げた自分の手すら見えない。闇に恐怖はないが、それでも何が起こるかわからないので用心する。掌にかかっていた微かな重みが消え、ネズミが掌から飛び降りたのを知る。

懐を探って取り出した照明灯をつけると、ぼんやりとだが隠し階段の全貌が見えた。

人が十分通れる幅の階段が下に続いている。

「王弟がいるのは五階だよな」

（そうです）

「じゃ、用心しながら降りますか」

足を踏み出したが普通の階段だった。

少しだけ不安だったのだ。何かの罠があつたら、と。何分、ここは調査してある場所ではないため、カルもいつも以上に慎重にならざるをえない。

ゆっくり伝い降りること数分、五階らしき部分についた。

「五階　だね」

（……ここにあのひとはいます）

「うん、ありがとう」

カルは神経を研ぎ澄ます。扉　らしき壁の前には誰もいないようだ。気配を感じない。

照明灯を消す。暗い場所で灯りがあると、かえって近い位置は見えにくいからだ。

カルはベルトに下げた短剣を利き手で握り締め、壁を押す。

扉はゆっくりとスライドする。段々と隠し階段に差し込む光量は増える。

急に入るのは、中の様子がわからないので危険である。もしかしたら、気配を消し、武器を持って待ち構えている可能性もある。静かに深く息を吸い、一拍待ったが、何の反応もなかった。

カルが安堵した瞬間、サツと差し込んでいた光が陰る。

待ち伏せされてたっ！  
隙間の向こうには、逆光でシルエットだけの男が立っていた。

### 3・秘された力！？（後書き）

「人物設定」

ファイル3：ユーガウド・トルディキア

現国王の弟だが、その存在は長い間月の塔に隠されていた。世間知らずの孤独な青年。

#### 4・門出の前に!?

腰の短剣に手をかけたままカルはごくりと唾を飲み込む。

王弟本人、だろうか?

驚きと躊躇でプロにあるまじき状態　動けないカルよりも先に、

逆光の男は口を開く。

「仕事?」

その声は、確かにあの晩の、闇の中で聞いた声。

トルディキア王弟。

ユーガウド・ジン・トルディキア。幼い頃から一人きりの　孤  
独な青年。

王弟は返事を待たずに体を傾け、カルを中へと誘い込む。

「よくここへ来ることが出来たな。一応、隠し階段なのに。さすが  
は《アカツキ》　高い場所の獲物は逃さない、か」

傾けた体で、遮られていたランプの明かりがその顔を照らした。

貴婦人も恥じらう程端整な顔。だが整ってはいるものの、灯りの  
下で見る彼は繊細な美少女ではなく、立派な青年だった。

ランプの揺らめく光で、深い陰影をつくる大人びた顔立ち。長い  
睫が落とす影と、憂いを含んだ瞳が、その微笑みを悲しげに見せる。

幽閉という事実が、急に現実味を帯びた。切なくなって、カルの  
胸はちくりと痛む。

カルにはニコがいる。

けれども、この男は何をするにも一人なのだ。

カルがニコと冗談を言ったり、笑いあったり、時には喧嘩したり  
しているとき、この男は話し相手もないまま、長い長い時間を孤  
独に耐えてきたのだ。

そう思うと胸が痛んだ。



だが、次の王弟の言葉で、カルはそれを後悔した。

「それで、何をしにここへ？ 私を盗みだす算段がついたのか？  
それとも、取引をやめて、私からこれを盗みだすつもりなのか？」  
カシヤリと音がした。

手で引つ張れば切れてしまいそうな細い金鎖に、無数の小さな石と真紅の宝石。ランプの揺れる灯りのせいで、濡れた様に光る。

王弟の手には、例の額飾りがあった。

カルがそれをじっと見つめていると、王弟は大袈裟に溜め息をついた。

「そんなことだろうと思った。どうせ私と取引する気はないんだろ  
う？ 一度、承諾したことを翻すとは、さすが盗賊と言うべきか」  
「っな！？」

「やはりそのつもりだったのだな」

カルを鋭く見下ろした王弟は揶揄するようにそう口したところで、

パシッ！

部屋を切り裂く鈍い音がした。

「……やだわ。手袋してるからいい音がしなかったじゃない」  
呆然と頬を押さえる王弟と、無表情で相對するカルがいる。  
音は、カルが勢いよく王弟を平手打ちした音だった。

「言っておくけど 受けた依頼は最後までやり遂げる。己の力も  
計れないようじゃ仕事にならないわ。それが裏のルールよ」

ふうっ、と小さく息を吐くと、カルは鋭く王弟を見上げる。

「馬鹿にしないでね。《アカツキ》は約束を破らない」  
考えるよりも先に手が動いていた。

じわりと赤くなる頬に申し訳ないと感じる優しさは今はないし、  
カルは臆さない。

「殿下が卑屈になるのは勝手だけど、人の仕事を貶めるのはよして」

王弟とカルは睨み合う。

時間も止まったかと思える。いや、今、この塔の世界には二人しかいないのだ。だから時間は二人のために流れるのをやめた。

数分後　王弟がそつと視線を外したことで決着する。

「……………悪かった」

消え入りそうな小さな声で謝罪する彼を意外な面持ちでカルは見ている。

空気が抜けた風船のように、沈む王弟の様子はまるで叱られた子供だった。すねたように下を向く。

拍子抜けした。まるで弱い者いじめをしているかのようだ。その姿を見ているうちに、カルにゆるゆると罪悪感が戻ってくる。見せつけるつもりではないだろうが相手が横を向いたおかげで、真っ赤に色付いた頬が正面に見えた。

互いに何も言わない時間が再び流れたが、先に動いたのは王弟だった。内心動揺しつつ仁王立ちのカルを窺ってチラリチラリと視線を送る。

何の言葉も言わない、何の態度も返さない、そんなカルが気になったのか。

余りの狼狽にカルの方が耐えきれなかった。

王弟が意外な程素直で、それがまたおかしくて。ついにカルは、身体を二つ折りにして悶えながら笑う。

「おか……………おかし、くくつ」

笑いながら王弟を見る。ぽかんと口を開けた、間抜けな顔だ。

彼は何を笑われているかわからないようだ。口を開けた間抜けな顔が、怪訝そうな顔へ変わり、きよとした瞳がそれを物語っている。

それすらカルの笑いを誘う。

「くくつ　あははっ」

「……………何故私は笑われているんだ？」

不思議そうな声は、とてもあの晩と同じ人物が出したとは思えない。

カルは笑いすぎて酸欠状態である。

「くくくつ　ああ苦しいっ」

「苦しいって、大丈夫か!？」

心配そうにカルに近寄る。まるでカルが心臓発作を起こしたかのように慌てふためき、顔から血の気が引いている。

それを見てうめいた。

苦しくなる程笑ったことがないの？　だからわからないの？　それはとても悲しいことだと思った。例え、本人が孤独を感じていなくとも、カルには王弟の孤独が見えてしまった。

苦しい程、笑わせてあげたい。

責任やプライドではなく、カル自身の意思で、王弟を自由にしてあげたいと思ってしまう。

笑ったり泣いたり、ふざけあったり、時には怒り、時には罵倒して。そんな人と関わる生活を送らせてあげたい。

カルは、闇のようだと言われる黒い瞳を静かに閉じて決意した。  
「殿下をここから必ず連れだすわ。今じゃないけど、必ず自由にする。約束するから取引じゃなく……今度こそ『あなたが』ちゃんと依頼して」

カルは頭一つ分背の高い王弟を、挑戦的に見上げた。

その挑発的な態度と相反する小さな微笑みを唇に見た王弟は暫し面食らった後、素直に笑った。

「依頼する　私をここから盗みだして欲しい」

「了解！　《アカツキ》に二言はない　三日後までに殿下を盗みだすわ!」

一度失ったものは二度と帰ってこないことを知っているから、償いに近いのかもしれない。

何より、子供のような縋る瞳を見捨てることなんて出来ないから。

「そうと決まれば考えなきゃ！ さて、どうやって盗みだすかな」  
カルは上から下まで王弟を観察する。

「切って持ち運べるものでもないし……大きすぎだよな」

不穏な事をあっさりと口にし、思案顔で一人頷く。王弟は大人しく、観察されるままだ。

「ニコはあたし以外を運んだことないし」

「ニコ？」

王弟は聞き返した。耳慣れぬ響きだからだろう。トルディキアの発音にはないから、ニイコと聞こえる。

「ニコとはなんだ？」

カルは考え事を一旦止めた。

「大鳥、あたしの相棒よ」

「その大鳥のニコに乗ってここへ？」

カルは呆れたように頷く。

「いくらあたしでもこんな高い所にこんな軽装備じゃ登ってこれないでしょ？」

「そう……か。そうだろうな。ここは王宮だった」

その余りに淋しそうな物言いにカルはハッと気付いた。

幽閉の身に一体世間の常識がどれほど備わっているのだろう。

赤子か子供みたいなものだわ、とカルは軽く溜め息をつく。

……ちよつと待ってよ。

彼は果たして、外へ出て暮らす当てはあるのだろうか？ 軽く嫌

な予感を覚えつつ、躊躇いがちに聞く。

「あー……あのさ、自由になったら、どうするの？」

「えっ？」

「えっ？ じゃないよ。自由になったらどこで暮らすの？ 決まってるんじゃないの？」

「……わからぬ」

まさに嫌な予感は当たった。

自由にしても、その辺で『のたれ死に』なんてされたら後味が悪

い。

かといって自分に抱えきれはしないだろう。何より冬至が迫っている。

冬至はカルとニコにとって特別な日だ。

初めて二人が出会ったのも冬至なら、カルが大切なものをなくしたのも冬至だった。カルにとって始まりと終わりは冬至と共にある。ガラス玉のように何の感情も映さなかったカルの黒い瞳に色を与えてくれたニコ。いつだって感謝してもしきれないくらいニコに助けられてきた。

冬至は特別なのだ。

「……仕方ないわ」

ニコが知ったら文句を言いそうだ、と思いつつ王弟を見る。そのすぐるような、けれど弱い印象を与えない瞳は強烈なまでの存在感を放っていた。

「うちに少しなら居候してもかまわないわ。冬至までには仲介屋に仕事を探してもらわなきゃだけどね」

「……よいのか？」

「さすがにそこらに放りだせないもの」

王弟の顔がパツと輝く。まるで子供だ。

なんか子守りでもしている気分だわ。

カルは苦笑を洩らすしかなかった。

「しかし、どうやって運ぶかな……」

カルは腰に片手をあてて考えこむ。

人ひとり 彼は細身だが上背はそれなりにある。体重は軽くないはずだ。

じろじろと上から下まで眺めるカルの視線に竦みながらも「俺は自由になれるなら何でもいい」と言う。

それならば、といたずらっ子のようにカルは微笑んだ。

「あとで回収してあげるからここから突き落としてもかまわない？」

一瞬、嫌そうな顔を見せた王弟にカルはニヤリと笑う。

「嘘に決まってるじゃない。殿下と首飾りに傷はつけられないわよ

……依頼品だし」

最後を力なく呟いて 依頼品じゃなかったらどんな扱いを受けるのかと王弟を恐慌に落として カルは何か使えるものはないかと中を見回す。が、特に使用出来そうなものはない。

そこで降りてきた隠し階段に思い至った。

「あの階段は下まで続いているの？」

王弟は頷くが、表情は冴えない。

「あの階段は地下まで続いているが、どの扉も鍵がかかっている。開いているのはこのこと最上階だけだ。他は出られない」

「鍵？ 隠し階段なの？」

「ああ」

カルの瞳は輝きだした。

開けられない鍵を開ける、これこそ盗賊冥利に尽きる。しかも、それなら今回の仕事に気乗りしないニコを煩わせることなく、この大きな依頼品を運べるかもしれない。

「あたし行くけど殿下はどうする？」

「私も行く。それから 私のことは名前で呼んでもかまわない」

「名前………ユーガウド？」

カルは一瞬、名前なんだったかな、と思ったことなどお首にも出さず、聞き返した。

彼は胸をはって答える。ただし、それは少しでもカルの気分を損ねる結果になるのだが。

「そうだ カルは特別に許す」

聞いてカルはぷいっとそっぽ向く。

嫌だ、というような彼女の様子を見て、王弟はおろおろとする。ただし検討違いの勘違いをしてはいた。

「いや、何でもいい！　好きなように呼んでくれてかまわないから焦っている。

狼狽している。

それはそうだろう　王弟にしてみたらカルはここから連れ出してくれる唯一の手段で、彼は依頼人であっても依頼品そのものなのだ。

うろたえる彼に申し訳ないがカルは段々楽しくなってきた。王弟の素直な反応は、ニコや他の人に望めないものだからだ。

「ふうん……じゃ、パイパイとかニコニコでもいいんだ？」

王弟はうつと怯む。慌てた様子さえ面白い。

「嘘よ　好きなように呼べって言われてもね。だったら新しい名前考えてみたら？」

「新しい名？」

「ここから出たら殿下はもう殿下じゃなくなるわけだから、ユーガウドなんて呼べないわ。ここに王弟がいるって言ってるようなものじゃない」

カルがカルになった時、喜びと、未知への憧憬と、希望があった。不安はゼロではなかったけれど、新たな自分を誇れるように生きようと思えた。

王弟にもそれを感じて欲しいから。だから、カルは軽く笑むと彼を見つめる。

「生まれ変わるのよ。自由になるんだから」

二人の視線が交錯する。

「名前はそのための第一歩だと思うわ」

王弟は、そんなカルをみて、何かを振り切るように決意を見せた。

「そうだな、その通りだ」

自分の言葉に、暗示を受けたように、段々と王弟の様子は自信に満ち溢れたものへ変わっていく。

「では、新たな生を送るための名をカルがつけてくれ」



#### 4・門出の前に!?(後書き)

「人物紹介」更新

ファイル3:ガウド

名前を変えて新たに生きようとするユー・ガウド・トルディキアのこと。

## 5・夜明けはどこに!?

「あたしが?」

「ああ。私を変えてくれるのは貴女だろう?」

「……………じゃあ……………ザーン。古の言葉で《明けていく夜》の意味よ」

闇色の髪の毛と同じ色の瞳だと、今の今まで思っていたカルは自分の間違いに気付いた。

ただの黒ではない。それは宵の明星が消えていく空の色。黒だと思ったのは、そこに生気が欠けていたから。新しく生まれ変わる、と決意したせいだろうか。瞳に光が加わったのだ。

いつか、本当の彼に会えるだろうか? カルはそう考えて、心の中で首をふる。

そこまで関わるべきではない。

カルには、やらなければならないことが待っている。せめて彼を早く自由にしてあげよう、それだけを考えることにした。

「……………ザーン」

「なんだ?」

ただ、新たな名前を呼んだだけなのに、心から嬉しそうに返事をする。

その素直さに僅かに心が痛んだ。

「……………階段、調べるよ」

「階段調べが私の第一歩、か」

彼は素直についてきた。どうやら階段自体は何度も出入りしているらしく、慎重に進むカルに、ただの階段だ、と進言する。

バカにしているわけではないのだろうが、その言い方が少し許せない。

「あのね、一応これは仕事の一貫なの。私の仕事は、緻密で慎重な

調査と、大胆で奔放な盗みから成り立っているわけ」

数段上にいる後方のザーンを振り向き、腰に手をあてる。

「どんな細かいことも見過ごせない。小さなミスが命取りになるの！」

言い放ち、再び慎重に進み始めるが、上からザーンの声が降ってきた。

「それは私にも出来るだろうか？」

それとは、盗みのことだろう。世間知らずの王弟である。

カルは深いため息をつき、もう一度ザーンを見上げた。

「あのねえ殿下、本気で聞いているの？」

呆れるのを通り越し怒りがわいてくる。

「あたしには目的がある。譲れないものがある。取り返したいものがあるの。殿下にとってはとるに足らないものかもしれないけど、あたしにとっては何より大切なものよ」

大陸中を巡った。最初に訪れた国はすでない。気の遠くなるような長い時間をさ迷って、それでも少しずつだったが手掛かりを掴んで。

その苦勞 いや焦燥がザーンに解る筈がない。

盗賊になりたかったわけではない。そうとしか生きられなかっただけだ。

「面白半分には首を突っ込まないでね。殿下にも、あるでしょう？ 大切な、何よりも守りたいものが」

長い睫毛を伏せ、カルは自分の身体に視線を落とす。

「私にそんなものがあると思えるか？」

ザーンの低い声が静かに降ってくる。

「……十年だぞ？ この塔に閉じ込められてから十年。その私に大切なものがある筈がないだろう？ 私の大切なものはこれから探すんだ。だから カル、君の仕事を手伝ってみたい」 カルは是と

も否とも言えず黙りこんだ。

話の通じる相手なら、躊躇いもせずに話せるが、ザーンは庶民の生活や価値観を知らない初心者だ。

余計まずい、とカルは思う。最初のすりこみが肝心なのだ。

「自由になるんでしょ!？」

「そうだ」

「……じゃあ何でワザワザ裏の仕事を選ぶの？ もつと堅実で殿下に合った仕事を選んで、そこで大切なものを探せばいい」

ザーンは首を傾げた。

「裏の世界にだってルールはあるわ。法に反していても、ルールに反しちゃならないの。自由？ 冗談じゃない。そんなものある筈がないわ」

一見、無法者の集まりであるかの裏社会は、決して非人間的な集まりではない。むしろ、裏であるからこそルールの厳しい遵守が求められる。

裏で仕事をする人間と無法者は同じではないのだ。

法という枷はなくても、ルールという柵がある。依頼の撤回もその一つだが、掲げた仕事内容から外れてしまうことも許されない。極端に言えば、暗殺ギルドに属していたら盗みはご法度だし、カルのように盗賊を標榜するなら殺人などはもつての他だ。稀に二つ三つ掛け持ちする者がいないではないが、情報屋は情報を、仲介屋は仕事の仲介だけを行うことが普通だ。

ルールの柵は自由とは程遠い。一般的に生きていく方がよっぽど自由である。法さえ守っていれば何をしても許されるのだから。

「こんな暗い塔から出て明るいところで生きていくんでしょ？」

「ああ だが、私の思う明るい生き方というのは明暗ではない」  
一歩足を踏み出したカルを止め、ザーンは溜め息をついた。

「言い方ひとつだな。私は、ここで一人で生きるより、誰かと笑っ

て生きたい。いい人生だったと笑って死にたい。盗賊だからとか裏のルールとかはどうでもいいんだ。ただ選ぶ道が欲しい」

「選ぶ、道？」

「カルがここに来るまで私の前には幽閉というたった一本の道しかなかった」

「選ぶためにはまず道を見つけないと、か。なるほどね。殿下の言いたいことはわかったわ」

「だから、カルの仕事を手伝ってみたい」

カルは目をそらし、階段を降りていく。

「道案内が欲しいんだ」

カルの道　盗賊になると決めた時に出来た道。けれど、それはカルだけの道だ。

「塔で十年だ。だからどれだけかかってても我慢出来る。……君の邪魔はしないと誓う」

「無理よ」

「何故だ！？」

説明する気にもなれなかったし、話したところで理解してもらえないとは思えない。何より、カル自身、それを気丈に話せるか自信がなかった。

それでも食い下がるザーンにカルは、小さな聞き取りにくい程かすれた声で告げた。

「殿下は十年、あたしには長くない時だわ……」

小さな溜め息が背後から聞こえた。

先ほどから何度もザーンが話しかけてきたが、カルはその全てを無視していた。重苦しい空気が狭い階段に溢れる。

「何故返事をしない？」

それでもザーンは懲りずにカルに声をかけた。

「おい！」

「……………」

「カル！」

幾度めか、ザーンがカルの細い肩を存外強い力で掴む。

「いい加減にしてくれ。何が気に触ったんだ！？」

構わず進もうとしたが、その手が許してはくれない。そのため、カルは後方へバランスを崩す。

ぶつかる！ そう思った瞬間、カルの体はほどよい固さのあたかなものに包まれた。

ザーンが間一髪という感じに苦笑する。

「引つ張れば転ぶ。当たり前なのに、何をしてるんだ私は」

そのまま、覗きこむかのように、カルを見つめた。至近距離に端正な顔がある。

耳が熱くなるのがわかった。

「大丈夫か？」

「……………ありがとう」

消え入りそうな声は、それでも彼に届いたようである。ザーンは首をすくめて、はにかんだ。

「いや、私が引つ張ったことが原因だし」

「そう、原因はあんたよ！」

「そうそう、原因は私……………って？」

カルは不自由な体勢から体を捻って、ザーンに詰め寄った。その挑戦的とも見えるカルの視線は、一直線に彼に向かっている。

「……………いい？ 絶対に自由にしておあげる。だから、自由になって、世界を知って、それから道を探しなさい。それからだって遅くはないんだし、簡単に見つけることでもない」

カルもそうだったから。

ニコと出会い、世界を知り、目的地までの道のりが決して安寧な

ものではないと悟った。足掻いて足掻いて、そして仕事を選んだ。

「殿下の……ザーンの道は塔の外へ無限に広がってるから。可能性はいくらでもあるわ。今、決めることはないわよ」

肩を叩きかねない気安さでカルは笑うと、ザーンはあからさまに落ち込んでいる。

がしかし、カルはここで不必要な一言を口にしてしまった。

「殿下　じゃないわ。ザーンはね、当たり前がわかってないのよ。わかってるつもり、なの！」

しゅんつとうなだれていたザーンが、うつてかわった表情で言い返す。

「常識がわからないからつてすぐに見つけられないとは限らないだろう！？」

「どつちにしたつてあんたには出来ないわよっ！　何にもわかつちやいないくせに！」

片方は大手をふつて歩けない盗賊、もう片方は本来こんな所にはないはずの幽閉の身。お互い、存在を知られてはならない立場だが、言い争いは止まらない。どのくらいたつただろうか。自由についてのカルの講義を、なかばふてくされて言い返していたザーンはぷいつと横を向いた。

心の底でガッツポーズを決めたカルの耳に、かぼそい制止の声が聞こえた。

（　めてください！　やめてください！　）

カルが下を向くと、ネズミが鼻をひくつかせていた。器用に後ろ足で立ち上がり、前足をばたばたとふっている。

正直、踏み潰さなかったけすこい。

「孫！」

「孫？　ああ、キャットか……？」

「キャット！？」

ザーンが手をさしのべるとネズミは躊躇いなくその掌にのる。

カルはザーンとネズミを交互に見て、ネズミを指差した。

「キャット？」

ザーンは破顔する。

「キャット。私がつけた」

カルは先程までの気持ちを忘れ、敗北感に打ちのめされる。というか脱力した。

「……馬鹿だわ」

心底馬鹿げている。

ネズミに天敵の名前をつけるとは。カルだったら、そんな名をつけられたら泣きたくなる。

孫ネズミ　キャットはザーンの手の中で鼻をひくひくと動かしながら、細く高い鳴き声で告げた。

（さつき、ニコさんが貴女を探しに来ましたよ）

カルの身体が緊張する。周囲の気配を探るが、近くに不穏なものはない。

だが、長居しすぎたか。痺れを切らしているのかもしれない。

「ニコ、ってカルの羽だろ？」

「そうよ。探してたってことは、帰る時間とどこかしら……って、えっ！？」

普通の人間なのに、動物の言葉が通じている？　カルはザーンを凝視する。その懐疑的な視線を正確に読み取り、彼は肩を竦めた。

「何となく、だけどな　キャットの言うことはわかるんだ」

「……何となく？」

「何となくニュアンスで。だから、チューチュー鳴いているようにしか実際は聞こえていないし。そうだな、本当はそんなことを伝えたいわけじゃなく、私の幻聴なのかもしれない」

「……心配しなくても幻聴じゃなさそうよ」

確認するまでもなかった。もう、わかる人など残っていないのに。「カルもわかるんだな」



「えっ!？」

「さっき、言っただろ？ 探してた、って。あれ、キャットが言ったことだろう？」

口は災いの元、とはこういう事か。しかも、言い訳が出てこなかった。まさか、こんな形ではれるとは思ってもいなかったカルである。

カルは諦めた。かといって自分から認める気もないが。

黙ったままのカルを返事とみなし、ザーンは納得したように苦笑った。

「それで……相棒、か。意志疎通が可能なら、きつとどこへでも

」

その先はカルの耳には届かなかった。

## 6・賢者と呼ばれし者！？

「とにかく、ニコが来たなら戻らなきゃ」

カルはザーンを押し退けて、階段を登り始める。

「下まで行かないのか？」

押されて壁に張り付いた形の彼は首を傾げた。

が、カルはそんなザーンをも引つ張る。

「あんたも早く戻ったほうがいいわよ？」

「何故だ？」

「ニコはね、恐ろしく勘が良いの。それはもう、予知！？　まったくいにね」

ザーンをズルズルと引つ張り上げながら、カルは足を進めた。

「前なんか、お仕事直前にターゲットを移動されただけど、ニコがその場所を当てたのよ？」

やっと自らの意志で階段を登りはじめたザーンを離して、カルはやや早足になる。

「でも、一番うらやましいのは賭け事よっ！」

カルは振り返りもせずに、叫んだ。

「えっと……大鳥は賭場へ出入り出来る、のか？」

そんな疑問を持ってほしかったわけでもなく、カルはややトーンダウンする。素直さも時に刃となるわ、とテンションも下がる。

「当たりを教えてもらってあたしが行くの。まあ、背に腹はかえられない時、のみだけど。普段は絶対、何が当たりかなんて教えてくれないのよ」

へえっとザーンはしきりに頷いていたが、カルに再び引つ張られる。

「だから、ニコが呼んでるなら何かあるのかもしれないから、用心しなきゃなの！　早く戻らなきゃ」

カルの早足につられ、ザーンも大股で登っていく。

開け放したままの五階についた。

「キャット、ニコはどこへ来たの？」

（この窓に、あそこから呼んでおられました）

ザーンの手の上で、小さな体を動かしながら、キャットが答える。  
カルは一直線に窓へ向かった。

窓から身を乗り出さないよう注意しながら、空を見上げると、霧の中から大鳥が現れた。

「カル、遅えよー！」

ゆっくり羽ばたき、スウィットと中へ入ってくる。

「おりゃ、帰るぜ？ 仕事の一貫は終わったんか？」

「うん、遅くなってごめん！ 帰ろ！」

「えっ！？ おい！」

慌ててザーンが声を上げる。

「私はどうすればいいんだ！？」

ニコがゆっくりとそちらを向いた。

「カル、こいつが王弟？」

カルが頷くと、ニコはザーンを一蔑し、フンと鼻を鳴らした。

「なんか、カルから聞いたイメージと違うな。馬鹿そうなやつ」

「……ニコ」

ザーンは、というと、こちらも好戦的な顔をしていた。

「カル、それ、ペット？」

ニヤリと口角をあげてニコを目線で示す。それ、と呼ばれ、あまつさえペット扱いされたニコも、鼻息荒く、応戦した。

が、すぐに気をとりなおす。

「おりゃー、こんな奴を相手にしてる場合じゃねえんだよ。カル、帰るぞ」

「あ、うん！」

ニコが窓から飛び出ていく。

「カルッ！」

「ザーン……」

呼ばれてカルは窓枠に手をかけて、彼を振り返った。  
「そうだ……ザーン　ううん、なんでもないわ。二日後、迎えに来る」

ザーンは、一瞬躊躇ったものの力強く頷いた。それを確認しカルは背を向けて、窓枠を蹴る。

一瞬の浮遊感と、体が落下し風をきる音を聞き、無事黒い羽毛に覆われた背に乗る。ニコは無言で旋回し、羽ばたいた。

濃霧の中を突っ切ると、じっとりとした言いようのない不快感がカルとニコを包む。

「……な、カル。あいつは、違うんだろ？」

「……うん。有り得ないよ。だって王弟だもの」

「そうだな……有り得ないか」

まとわりつく霧と同じように、重苦しく漂う闇。

「……カル」

「何……？」

ニコが首を巡らし、こちらに顔だけ向けた。

「おりや、腹減ったよ！　飯は？」

重い空気はどこへやら、いつものニコだ。

「時間外労働だぜ！　いいもん食いたいよ、なあ、カル！？」

カルはニコの背で自然と笑いを溢した。

「だゝめ！　《アカツキ》は節約中ですっ！」

「そんな。おりや、たまにはおいしい木の実が食いたい……」

「終わったら、ふかふかタオルだけじゃなく木の実もつける。しかも奮発してニコの長椅子の張り替えもしてあげよう」

カルが請け負う。

《アカツキ》は仕事を選ぶので、報酬は良いが仕事量は少ない。万年貧乏なのだ。

懇意にしている仲介屋の持ってきた仕事でも、受けるのは三割程。

だがその三割のうち殆どは、カルの欲しいものを示してはくれない。目的から外れている。

「……カル、何か企んでるだろ？」

さすが相棒、するどい。

「えへっ！ 暫くザーン 王弟を預かるね」

「ええ〜！？ 何だよお？ おりゃ、嫌だ」

「いや、さすがに外に出て、のたれ死になんてされたら嫌でしょ？」

ニコはぶちぶちと愚痴をこぼす。大半は風の音で聞こえなかったが。

「あいつ、この俺様をペットよばわりしたんだぜ？ おりゃ、嫌だよ」

「ニコだって馬鹿よばわりしたじゃない？」

「だって、だってよう……」

ニコが再びカルを見た。

「……わかったよう」

大袈裟な溜め息が聞こえ、カルは密やかに笑う。

「おりゃ、カルにやっぱり甘いんだよなあ」

「で、どうするんだ？」

定位置でニコが、欠伸を噛み殺しながら聞く。無意識に鍵爪で長椅子の綻びをほじくっている。

「椅子が悪くなるからやめて で、どうするって何が？」

首をすくめ、丸くなったニコは呆れたようにカルを見た。

「おいおい、おりゃ、知らんよ？ そんなんで王弟を誘拐出来んのかあ？」

カルは弁解する。

「忘れてたんじゃないよ 主語がないからわかんなかったの！」  
「どうだか」

カルは応接テーブルに足を投げ出し、両手を挙げて伸びをした。マナーが悪いことこのうえないが、これがカルの考える時のくせである。

ニコはそれを知っているので、邪魔などしない。窓辺でまどろみ始めた。

そんなニコをチラリと横目で見て、カルは《月の塔》へ意識を飛ばす。

隠し階段は調べられなかったがザーンを信じれば施錠されていると言っていたので、多分そこは使えないだろう。鍵を開ける自信はあるが、どこに出るかもわからない。そんな心もとない方法は取れなかった。

やはり、いつもの手しかない。

「ねえ、ニコ」

体を起こして、窓辺を向く。

猫撫で声で呼ぶと、大きな翼で顔を隠しまどろんでいたニコは、羽をずらし、片目でカルを嫌そうに見る。

「なんだよお？ また何か企んでる？」

「さっすが相棒！ 悪いんだけど依頼品を乗せて運んで欲しいな」  
小首を傾げて甘えてみる。やはり、ニコに運んでもらうのが一番安全な気がした。

「ええ！ おりゃ、嫌だ！」

「そんなこと言わず、ねえ、ニコちゃん？」

「んじゃ、万が一、俺が運んだとして、カルはどうするんだ？ ばやばやしていると見付かっちゃうぞ？」

「私より依頼品。それに、今回は依頼品が二つ、だし」

「額飾りと王弟か」

「そつ、だから絶対に失敗出来ないの！ それと」

カルはニコに向かって、無邪気に笑う。

「王弟って言うのも微妙だし、名前呼んだらすぐに疑われちゃうから、ザーンって名前をつけたのよ。ニコもそう呼べばいいわ」  
「《明けていく夜》か、《夕月》か……まあ別にどっちでもいいよ、おりゃ　それより、カルその頼み事だけどもな、条件によっちゃ聞いてやつてもいいぞ？」  
「条件？」

ニコは、カルにはわかる何かを懸念するような目をしていた。ニコがこんな表情をしたならば、何かが気になっていることは間違いない。

そう、確か本来の依頼を受けた直後も、こんな顔をしていた。

あれは十日程前の夜のこと。珍しく霧は薄く、景色が遠くまで見えて、それらの灯りがぼんやりと滲み、まさに幻想の国と呼ぶに相応しい夜だった。

ニコの長椅子を無理矢理占領し、明日からご飯どうするかな、等と貧乏丸出しの悩み事をしていたカルは、次の仕事は絶対に何が何でも請け負う、といきまいていた。なぜなら、依頼を選び好みしている《アカツキ》は最近、活動休止中である。

前回、仲介屋が持つてきた仕事を簡潔に言うと、依頼人はいわゆる『愛人』で、依頼内容は『本妻から旦那を盗んできて欲しい』だった。余りに、馬鹿馬鹿しいのと、そういった依頼の事後処理が大変なこと、またカル自身やる気が起きる内容ではなかったので、法外な報酬を提示されたが断ったのだ。

「もったいないことしたなあ……うう……お腹減った」  
ぼやくように呟いたカルに、ニコが明らかに冷やかな視線を送る。が、何を言われるかわかっていたので、無視した方が賢明だと判断した。

それにしても、遅い！ とカルは壁にかかった時計を見やる。時刻は既に八時を回った。約束の時間はとうに過ぎている。

仲介屋が遅れることなどほとんどない。大抵、依頼をいくつか持つてやってくるのだが、それにしても遅すぎる。

空腹によつて、時間に遅れている仲介屋にいつも以上に苛々している、場違いな程明るい声がした。

「仕事の幹旋に来ましたよ、カルさん！」

仲介屋の声が玄関扉の向こう側から聞こえる。

軽くため息をつき、何て文句を言つてやろうか考えながら扉を開けると、仲介屋が苦笑しながら、立っていた。

その後ろには見慣れぬ男が一人 目隠しされていてもわかる威圧感のただ者ではない。

……この男、どこかで……それにこの色……。

その表情は夜の海のように凪いでいたが、カルは混乱する。

「すいません。今回の依頼はカルさんにしか頼めないんですよ。だから連れて来ちゃいました、依頼人！」

男はゆつくりと目隠しをとった。静かな、だがパチパチとはぜる炎を思い起こさせる、冷たい黒い瞳。

「あー、えっと……依頼人です」

見ればわかるわよ！

男と同じく応接用の長椅子に座ったダダイが口を開いたが、カルの冷ややかな視線を受けて縮こまる。

依頼の内容を吟味する前に依頼人連れてきて、どうするわけ！？

カルは心中で毒付いた。だがしかし、来てしまったものは仕方ない。依頼人には ダダイは別だ 穏やかに微笑み、話しかけた。「まず前置きですが、依頼を受けるとは限りません それでければ、お聞きしましょう」

威圧感のある男は、ニコリともせず、カルを見据えた。



「盗んで欲しい物がある　だが、聞いたなら必ず受けてほしい」

「必ず……ですか？」

「ああ、必ず、だ」

突然、隠れていたニコがクアーツと高い鳴き声をあげた。

ダダイと男が驚くように見やる。

ダダイには話してあったがニコと直接会ったことはない。まして男は、当然初めて見たのだろう。珍しそうにニコを見つめた。

「大鳥、か？　話に聞いたことはあるが……」

ニコは首を振っていた。カルにだけわかる、何かを憂いているような瞳。

「……あの、申し訳ありませんが、受けられません」

男が眉を潜める。

「何も聞かずに断るのか？」

自分で言った先程の言葉と矛盾しているが、男の言いたいこともわかる。

だが、ここはニコの直感を信じるべきだ。

大鳥は本来そういうものなのだ。未来を予感し、過去を憂い……かつて《賢者》と呼ばれていた　神と共に在る生き物。

そんなニコの予感カルには絶対だ。

男は少しだけ考えたあと、カルに切り出した。

「君に断る権利はある。が、君以外にこれは不可能だ。君の、その大鳥なら出来るだろう。盗んで欲しいものは　王宮にある」

## 6・賢者と呼ばれし者！？（後書き）

「人物紹介」

ファイル4：ダダイ・ウィーラ

若いが一流の仲介屋。『アカツキ』の仕事はいつも彼から請け負う。

## 7・交わした誓い！？

王宮？

それは、カルにしか出来ない、だろう。

カルは一度、王宮に忍び込んだことがある。

それは、仲介屋ダダイが困りきってカルに依頼した要件だ。誰に依頼しても失敗するから　とカルに頼みこんで、カルはその依頼を見事にこなした。

騎士に守られた、トルディキアの王のいる場所。ニコがいなければ、門さえ越えられないだろう。だから、カルにしか入り込めない場所。

難攻不落の王宮を攻略する高揚。今でも思い出せば達成感に身震いする。

カルは相棒をチラリと見た。相棒　ニコは、フウーっと溜め息をついた。

ニコもわかつている。こうなってしまったカルを止めるのは難しい。仕方なく頷いた。

「請け負います。盗む物は何ですか？」

「盗んで欲しいのは、額飾りだ。期限は十日」

男は懐から一枚の絵を取り出した。

大きく紅い宝石と繊細な金鎖のそれは、見ただけで高級な物だとわかる。アクセサリーではなく、宝の部類だった。

「これは　ルビー、ですか？」

「そうだ。ルビー、ピジョン・ブラッドと呼ばれる最高の品だ。場所、王宮　《月の塔》」

「《月の塔》！？」

それは 侵入不可能と言われる王宮の、なお最奥に位置する。カルに耳にした情報によると、隠れた要人を監禁する塔らしいが。「なぜ、そんな所に？」

「詮索は不要」

冷たい声がカルに突き刺さる。言い返そうとしたがダダイが首を振った。

「カルさん、お願いします。詮索はしないで下さい」

……って言われても。

無茶な話である。

背景を知らなければ、どんな簡単な仕事も複雑になる。だが、仲介屋は本来、こういった話に口を挟まない。それは、カルの仕事に対する姿勢 綿密かつ慎重な調査と、依頼の理由にこだわる事をよく知っているからで、だからこそ、詮索するな、と言われてしまえば反論も出来ない。

ダダイは、この若さで一流の仲介屋だ。しかも稀なことに情報屋も兼任し、そのどちらでも称賛を浴びていた。彼は、あらゆる情報を駆使し、適任と思われる仕事屋に依頼する。

カル自身、ダダイ以外の仲介屋から仕事の斡旋を受けることはない。それだけこの仲介屋を信頼していた。その彼に一度無理と言われてしまえば、聞きづらい。

安請けあいなんかしなければよかったかな。

カルの悪い癖だ。ニコを横目で見れば、大仰に溜め息をつかれた。

「……わかりました。仕方ありません。ですが」

カルは少しだけ溜め息をつき、男を見つめる。

「《月の塔》、とは。報酬に危険手当を上乗せしても？」

「かまわん、応じてくれるのなら。仕事の相場はダダイ君から聞いているが、二倍……いや三倍だそう。《月の塔》だから、な」

三倍！？

しばらく遊んで暮らせるだろう。だが 法外すぎる。そもそも危険手当てというならば、倍がいいところである。

「……それは……ありがとうございます。しかし」

「いや、いい 報酬は六百デイル。よろしいか？」

「……はあ。いいです、けど……」

男は初めて冷たい瞳を和ませる。

「では契約を ダダイ君」

「は、はい。カルさん、こちらに署名を」

ダダイが報酬額を記入し、薄い紙に書かれた契約書を差し出した。ざっと目を通し、カルはサインする。

「では、契約成立です」

カルから契約書を受取り、ダダイは安堵したように笑った。

「よろしく願いますね、カルさん」

「カル！ おい、カル？ おいおい、聞いてんのかあ！？」

呆れたようなニコの声でカルは我にかえた。

「条件、だよ。聞くのか聞かないのかはつきりしようや」

「ごめん で、条件って何？」

呆れたようなニコの声でカルは我にかえた。

「条件、だよ。聞くのか聞かないのかはつきりしようや」

「ごめん で、条件って何？」

ニコに向かって合掌し、素直に謝ったカルは、応接テーブルに投げ出していた足をおろした。

「……条件、は言えねえ。おりや、卑怯だかな」

クアックアツと高い鳴き声をあげ、ニコは笑う。だが、言葉とは裏腹に、その瞳は真剣なものが漂う。真っ黒の、闇を凝縮したような瞳。

そうだ、この目よ。

カルを導いてくれる者の瞳。

確か、男とダダイが帰った後もこの目でカルを見た。ニコが、あの男は信用出来るか？ と聞いてきた時もだ。

依頼品の場所も王宮にも詳しそうなのにカルに依頼するなんておかしい 何かが矛盾している と。

「やっぱり、気になるの？」

何が、とは言わない。

ニコが答えることなど滅多にない。多分、カルがまだニコに伝えられないからかもしれない。

「んにゃ、別に おりゃ、カルがよければいいよ。で、のむか？ のまないのか？」

「のむよ」

躊躇することはない。ニコは、識っている。だから ためらうことはない。ニコならば必ず事態を好転させる。

「よっしゃ！ そうこなきやだ」

ニコは満足そうに、濡れたように光る黒い羽をはばたかせた。

「依頼品を運ぶ条件は？」

「依頼品は運ぶ 同居も仕方ねえな、認めるよ。だが、カルが、もし」

ニコが、カルから目をそらして、窓の外を眺めた 王宮の方角を。

「もしも、誓いを破ったら……」

カルは、ハッと息をのむ。

「俺は、大烏だ。だから、誓いを破られちゃかなわん。それが……条件だ。守れるか？ 約束出来るか？」

「……守るよ。約束する」

口が裂けたって言わないよ、と軽口を叩いてニコに近寄った。  
その、黒い胸の、フワフワの羽毛に顔を埋め、ニコを抱く。

「大丈夫、だよ。あたし達は、大丈夫」

ニコが翼でそっと、カルを包んだ。

「何も心配すること、ないよ」

「……わかってらあ」

ぶはっと息を吐いて顔を上げ、ニコを見上げる。

「じゃ、依頼品をお願いします」

おどけたような表情で、カルは頼んだ。

「まあ、仕方ねえよな。やってやるよ。で、カルはどうするんだ？  
俺が一度に飛ぶのか？」

「まあ、そうなる、かな？ ニ、コ、ちゃん！ よろしくね！！」

「俺の羽、傷むよ？」

「大丈夫、大丈夫」

楽観的にニコの胸をポフポフ叩き、相棒から離れた。そんなカルの背をニコの声が追い掛ける。

「なあ……それ、俺だけじゃダメなのかあ？」

「え？」

振りかえれば、ニコが器用に首を傾げていた。

「運ぶだけなんだろう？ 俺ひとりで十分じゃねえか？」

確かに。

カルは一瞬納得しかけるも、すぐに否定する。

「ダメよ。私達は二人で《アカツキ》なんだから！」

「そうだけんどもさ」。二人も乗っけんのおりゃ久しぶりだしよう。  
重くて嫌なんだよ、あれ」

ニコはカルを真っ直ぐに見つめた。

「ダメダメ！ ニコにはあたしがついてないと。それに、あの様子  
じゃあね」

「あの様子？」

「そう、ニコとザーン。真っ直ぐ帰ってこなそう、言い争いで」

うつ　とニコが怯む。身に覚えがある上に、本当にそうなりそうだからだ。

「……わかったよう」

「じゃ、計画を立てましょ！」

カルは応接テーブルに、大きく紙を広げた。以前手にいれた情報を元にカルが作り上げた王宮の地図。

その一点を指差し、ニコを見る。

「ここが《月の塔》」

ニコが大きな体を揺らして近寄り、地図を覗きこむ。

「《月の塔》が見える見張りはここ、ここ、ここ」

指を滑らせ、三点をつつく。

「見張りの交代時間は変わってない、から……午後十一時前後だね」「せいぜい十分だぞ？」

カルはわかつていいる、と頷いた。

「それも、皆が一斉に目を離すことは　ない。とにかく、大事なのはここ」

《月の塔》から一番近い場所を差す。

「　たぶん十一事前に目を離す時間がある」

「そこまでは、上空高く飛べばいいかあ？」

「うん。リスクはあるけど、多分それがいいでしょ？　さつきもそれで大丈夫だったし」

「了解！　で、問題はその後だろ？　十分に飛んで消えるのは、やっぱ無理だぜえ？　二人乗ってりゃスピードは落ちるからな。高くも飛べねえし」

「だよね」

「　大体、いなくなったらマズインじゃねえのか？」

えっ？　と顔を上げたカルにニコは呆れたように嘴をふる。

「王弟……ザーンか。ザーンは幽閉されてんだろ？　だったら、いなくなったらバレるだろ、すぐに」



「……マズイかな、やつぱり？」

「……どう考えてもマズイだろ」

カルは、体を起こす。うーん、と伸びをして足を投げ出した。  
「似たような体型の死体を探す、か。んで、変装させる。燃やしちやえば一緒」

「そりゃダダイにたのみやいいだろ？」

「んじゃ、頼みに行くとしましよう。とゆうことは」

「行きも時間かかりそうだよなあ」

ニコが首を降った。

「五倍ぐらい報酬貰うべきだったんじゃないか？」

「そうかも……」

力なく笑い、カルは溜め息をついた。

「よし、どうするかな。死体を運んでザーンとすりかえる　これは決定ね。いい？」

「いいぞ。そうしなきゃ後がマズイからな」

「問題は運ぶ方法　ニコがいつものスピードで運べるのはひとり分。見張りが目を離すのは十分。距離はこんだけ」

王宮の塀の外から《月の塔》へ、つつーと指を滑らせた。《月の塔》が侵入不可能と言われる所以　遠すぎるのだ。

しばらく指を往復させていたカルは立ち上がり、ついたての陰にある貯蔵棚をあけた。ニコがそれに合わせて視線を地図からあげる。  
「さて、と」

「……それ、俺のデザート」

「また買ってあげるから」

麻袋に入ったニコのデザート　木の実をふってカルは笑った。  
「では、協力を乞いに行きましょうか！」

「……カルさん」

「なあに？」

複雑そうな顔でダダイはカルを見下ろしている。後ろでひとつに

くくられた栗色の髪が心もとなそうに揺れる。

「……なんで、こんなもの、必要なんです？」

一昨日、あれからカルはすぐにダダイの元に行き『こんなものの調達を頼んだ。』

そう 死体の調達を。

王弟ユーガウド、つまりザーンの体型に似たような死体を探して貰ったのだ。行き倒れや、仕事で命を落とした身寄りのない人など。たくさん の 遺体を 胸を押さえながら 見て、すりかえる相手を見つけた。

「なんでって……」

ダダイにはザーンの件 額飾りを手に入れるための交換条件は伝えていない。

少しだけ思案し、ダダイを見上げた。

「額飾りを手に入れるのに 必要、だから？」

「なんで疑問系なんです……」

不可解そうに蜂蜜色の瞳を細める。

まあ、私でも、きつとダダイの立場だったらそう思うわ。

内心、深く溜め息をつきながらカルは立ち上がった。

「ねえ、この情報料とか…… 必要経費にして、依頼人に請求してくれない、かな？」

「本当に、必要なんですか？」

探るようなダダイにカルは頷いた。

ザーンを盗み出さなきゃ額飾りは手に入らない。ザーンを手に入れるには、身代わりが必要なのだ。

間違っ てないよね。

そう思ったカルは、ダダイと視線を合わせる。

「どうしても いるのよ。だから、必要経費で請求お願いします」  
「まあ、請求は可能ですけど……」

「よろしく！」

ダダイは懷から、箱と小瓶を取り出した。

「これはもうひとつの頼まれていたものですけど……これも請求しときます？」

両の手に乗る大きさの箱。その上の小瓶は、コルク栓で蓋のされたガラス瓶で、薄蒼い液体が満たされていた。持つと箱は意外と重く、ちゃぽんと瓶が水音をたてる。

「ありがとう。それもお願い　あつ、待って！　箱だけでいいや。

小瓶はこの依頼以外で使うかもしれないから」

「わかりましたよ。でも　本当に必要なんですか？　何に使うんです？」

「秘密　じゃ、ありがとう。成功したら連絡するわ」

ふくみ笑いを残してカルはダダイを追い出した。

## 8・順調なお仕事！？

「さて、と」

カルは周りを見回す。部屋には様々な物がひしめいていた。全てが今夜、必要な物。

「ニコ」

「わかつてらあ。ほらよっ！」

ニコが上手くそれらを避けて、カルの仕事用具を放る。たたらを踏んでそれを受け止め、カルは毒付く。

「もう！ 危ないじゃないっ！」

言いながらも、素早く身に付け、真っ黒になる　夜に、闇に、溶けこむために。

自分を取り戻すために。

「大丈夫かあ？」

ニコが心配そうに見やった。視線の先には、あの遺体。

白い布でくるみ、麻袋に入れ、黒い布で再びくるむ。それを黒く染めたロープで縛ってあった。

「大丈夫、大丈夫　ニコ。確認、お願い！」

カルは手元のメモに目を落とした。

「ザーンすり替え用の遺体」

「ある」

「黒いロープ」

「ある」

「あの箱と小瓶」

「あらあ」

順々にチェックをして、カルはふうつと息を吐く。

「最後、ザーンの着替え」

「……………ない」

「ない!？」

カルは床を見回した。

「なんだ、あるよ。ロープの向こう」

ニコからは死角になっていた場所に、それはあった。ロープは高くとぐるを巻いていたために見えなかったのだ。

「では」

遺体をロープで吊ると集合住宅の屋上に運ぶ。人はとても重い。

汗だくになりながら、階段を登り終え、全ての準備を終えた。

「そろそろ時間だ。行くかあ」

カルとニコは顔を見合わせ、くすりと笑う。

「我等は闇を想う者」

カルはニコの頭を撫でた。ニコはゆっくりと目を閉じ、嘴でカルの腕を掻いた。

「《アカツキ》今日の依頼は二つ。紅い宝石の額飾りと王弟ユーガウド・ジン・トルディキア」

「行くぞっ!」

ニコは掛け声と共に窓から飛び出した。

クアァッと甲高い声とともに旋回し、カルを目だけで呼ぶ。それに頷き返し、窓枠に手をかけ飛び降りた。

一瞬後に、暖かい背に着地し、飛翔する。

「王宮、《月の塔》へっ!」

トルディキア王宮の上空。

霧が濃く薄く一人と一匹を取り囲む。

眼下には、ぼんやりと煙る光の群れ。まさに幻想、と呼べる景色。

「……そろそろだね」

胸元から、親指ほどの大きさの懐中時計を取り出したカルは呟いた。そして上空を見上げ、声をはる。

「時間が来た。《アカツキ》は《月の塔》を目指す。その後、旋回、合図とともに《月の塔》に戻れ」

ニコが頷いたのが動きでわかる。

「行くよっ!」

体を斬る風　黒い疾風となり、闇に紛れる。

かなりの高さだった。少しだけ胃が浮きそうな奇妙な感覚がカルを襲う。

それも慣れた頃、《月の塔》の五階に着いた。

だが、ニコは止まらない。速さを緩めたりしない。それもいつものことだ。

ニコの背で立ち上がり、風を頬に受け止め、宙に飛んだ。

「到着!」

「カル!？」

ザーンが驚きの声をあげた。

カルはスタッと華麗に月の塔に着地する。無駄のない動きで立ち上がり、入ってきた窓に近寄った。

「ザーンも手伝って」

「……何を？」

窓に寄れば黒い包みが、空中に浮かんでいる。

「何だ、それ？」

カルはその包みに手をかけながらザーンを振り向く。

「これ？　これはユー・ガウド・ジン・トルディキアだよ」

「そうか、私か。……何!？」

「身代わり。時間がないから早く手伝って!」

頷きながらザーンが慌てて包みに手をかけ、窓から内部に引き寄せた。

それはボトリと、音もたてず床に横たわる。カルは素早く三重の包みを開き、遺体を空気に触れさせた。

なんとも言えない臭いが鼻をつく。

「それは……誰だ」

「そんなのは後。早く！ 時間がないの。あんた、服を脱いで！ 着替えはそこ。で、その鞆にどうしても必要なもの、換金出来るもの、額飾りを詰めなさい！ 早くっ！」

驚きながらも言われた通り動き出す。脱がれた、まだ温かい服を遺体に着せる。

ザーンは、すでにまとめてあったのだらう。大事なものはさっさと詰め終わり、換金出来そうなものを部屋中から掘り起こし、鞆に入れていた。

そんな彼を横目にカルは持ってきた箱の蓋を開けた。

中から肌色の陶器のような質感をした粘土らしきものが顔を出す。それを手にとり、伸ばしていく。さらにもうひとつ、箱から出した白い粘土を丁寧に薄く伸ばす。

見れば、荷造りが終わつたのだらう 鞆の蓋を閉じたザーンに

カルは声をかける。

「次！ 壁際に正面向いて立って」

ザーンは何か言いたそうにしながらも、素直に壁に向かう。白い粘土を持つて、カルは慎重に壁に寄つた。

「少しだけ苦しいかもだけど、我慢して！ 十秒だから」

「……え？」

「えっ？ じゃない！ 目を閉じる。早くっ！」

カルの剣幕に驚いてギュッと目を瞑つたザーンに溜め息をついた。

「……普通に目を閉じて」

「はっはい！」

少しだけ震えた臉に苦笑しつつ、カルは息を吸い込む。

「じゃ、少し我慢して」

そう言つとカルは勢いよく平たく伸ばした白い粘土をザーンの顔に叩き付けた。弾みでザーンの体が動く。

「我慢！ 十、九、八、七、六、五、四、三、二、一、零……」

ゆっくりと粘土から手を話すと、粘土は落ちずにザーンの顔にと

どまる。

よし、大丈夫。ひとまず成功ね。

カルは両側を持ち、ザーンの顔から粘土を剥がした。

「痛っ！」

剥がした途端、声をあげザーンが顔を両手で覆う。しかめた顔を指の間から覗かせながら、カルを見た。

「おいっ！ 何だ、それは！？」

カルは彼を無視して懐中時計を確認した。

「あと五分」

ザーンからとった粘土はカチンカチンに固まり、顔型となる。それを手に、カルは着替えた遺体に近寄った。

床に膝まずき、合掌し、黙祷する。心中で謝すると、肌色の伸ばした粘土をのせた。そのままザーンの顔型をのせ、力をかける。さらに数秒待ち、型を外せば、彼の不完全な顔がそこに出現した。

素早く化粧を施し、睫や眉を埋め込み、それらしく穴を開け、境目をなだらかにする。遠目に見れば、ザーンが横たわっているようだ。

だが、近寄れば一目瞭然である 別人だと。

しかし、カルは気にせず次の作業に移る。

「おっ、おい」

「黙ってて」

遺体を吊していたロープを全てたぐりよせた。

ロープは三十本以上はある。それらの端をひとつに結び、ほどけないよう、遺体の包みを縛っていたロープで強化する。

「ヤバイ。足りないかな？ いや、大丈夫かな？」

ギリギリまで結び、小さな輪を最後に作った。

「間に合った」

カルが一息ついたときに、何か黒い生き物が飛込んできた。

飛込んできたそれはニコ ではない。クアツと小さく鳴き声を



あげると、カルに向き直る。

（……出来たか？）

「もちろん。《アカツキ》だもの」

（そりゃあ、頼もしい）

黒い生き物　カラスは、クアックアツと笑う。

実は、ニコのデザートを賄賂にカラスに協力を頼んだのだ。行きは遺体、帰りはカルを運んでもらうために。カルだからこそ可能な  
普通であれば意志疎通は困難である。

（じきに仲間も来る）

「うん、ありがとう」

カルがそう言うとかラスの黒い嘴がロープをくわえる。

次々に仲間　他のカラスが到着し、皆がロープに群がる。ザンは呆氣にとられ、その様子を見ていた。

全てのロープにカラスが繋がった時、窓から甲高い声がカルを呼ぶ。

「カル、早くしろよ！」

「わかってる！　みんな、行つてっ！　ザンはニコの背に乗つて  
！」

「あつ、ああ」

カラスが一斉に飛び立ち、窓枠からザンが飛び降りる。ニコの背に無事乗ったことを確認して、カルは懷から小瓶を取り出した。

布で鼻を押さえ、コルク栓を抜く。

薄蒼の液体を、遺体の顔　粘土の部分に数滴、振りかけ、カルは踵をかえた。そのまま窓枠に飛び乗る。

「みんな！　よろしく！」

三十数羽のカラスが塔の際で羽ばたいていた。

カルは目を凝らし、黒いロープの結び目に手を伸ばす。しっかりと両手でそれを掴み、窓枠を蹴った。

っ！

ずしりとカルの細い腕に負荷がかかる。

……やっぱり足りなかった！？

ギリギリとロープが締めまり、指を咬む。巻いた手首が、痛む。  
「登って！」

ユラユラと右に左に揺れながら、カルとカラス達は移動していく。  
ニコはザーンを背に乗せ、カルの周りを旋回する。

「カル！ 大丈夫か！？」

「平気っ！ ザーン、ちょっと脇にどいて！」

カルが返事をしたときに、見張り場に灯りがともった。眼下を見下ろし、カルは舌打ちする。

見付かった？

だが、カルはともかく、ザーン 依頼品は必ず持って帰らなければ。一度、引き受けた仕事は絶対だ。

「ニコ！ 行つて！」

「でっ、でもよう……」

「行つて ！ 大丈夫だから！」

ニコは何度か首を巡らし、叫ぶ。

「背中 of 置いたら、すぐに戻つてくらあ！ 待つてろ！」

それに頷きを返し、心配顔のザーンを見つめ、安心させるように笑う。

が。

突然カルの視界がぼやけた。

## 9・痛めた羽根！？

空気の抵抗　　降下する浮遊感。

思わず上を見上げるとカラスがいない。

落ちる！

カルがそう思う間もどんどん降下していく。

「カル！？」

ザーンが気付き、その声でニコが旋回する。  
躊躇いは一瞬だった。

「……やるしかねえ！」

闇を、霧を、漆黒の翼が鋭く切り裂く。

王宮の屋根まであとわずかのところで、カルは止まった。惰性でグラグラと揺れる体。そのまま、見張りの目の届かぬ高さまでバサバサと音をあげ、上昇していく。

死を覚悟した体は、一瞬何が起きたのかを理解出来ない。  
先に動いたのは感情だった。

助かった。

だが、次に思考回路が復活し、自分の状況を悟る。ニコの背で、ザーンがカルの腕を掴み、必死で耐えていた。

黒い流線型の身体は上昇する。

……ニコ。

黒の、濡れ羽が、ギシリと音を立てたような気がした。慌ててザーンにむかつて声をあげる。

「離して！ この速さで飛んだらニコがつ！」  
だが、答えたのはニコだった。

「馬鹿言つなよう。カルがいなきや嫌だぜ、おりゃ」

のんびりと　そんな余裕などないくせに　やけに間のびした  
声が響く。

「……まあ、とにかくだ。おいっカラスども！」

クアツと短い鳴き声を聞く。カルのまわりで、三十数羽のカラス  
が口々に謝る。

「手伝え！　カルはロープに捕まれよ。その方が軽くならあ！」

言われた通り、カルはカラス達のロープを掴む。ただし、足は二  
コに接したままで。ザーンが無言でカルの腰を支える。

これなら揺れないし、ニコに負荷もそれほどかからないだろう。

「……ニコ」

「んあ？」

「……ごめん」

首をふってニコは家を目指す。

乾燥剤にふかふかのタオル、大好物の木の実に長椅子の張り  
替え、これだけじゃ足りない。

ニコの体は悲鳴をあげる。このスピードでは当然だ。カル一人だ  
けを乗せているかのような速さで城下町までやってきた。

「ニコ、私、歩くから先に帰っていて！」

「おりゃ……大丈夫、だよお」

ゼエゼエと荒い息を繰り返しながら、ニコは言う。ただしスピー  
ドは全く落ちていない。

「全然、大丈夫そうじゃないよ！」

カルが言ったとたん、今まで無言だったザーンが呟いた。

「　私も歩くよ」

目を見開いて見ると、歪められた眉としかめられた眉間がザンの  
心情を現していた。

「私も、いや、私が歩く」

カルも顔をしかめた。

「あんた、道知らないでしょ？　話にならない。　ニコ、いいか

ら降ろして！」

うつ、とザーンが怯む。言外に口を聞くなと、告げられたのが如く。傷付いた表情を見せる。

それをカルは見事に無視した。

そんなことはカルにとつて、たいした問題ではない。

ニコの大きな闇の翼が悲鳴をあげたような気がした。速度はむしろ上がっていたが高度は徐々に低くなり、今はもう家々の屋根に飛びうつれるようなくらいだ。

だが。

「……ばか言うなよお。おりや平気だかな！ それよりも……大丈夫か！？」

ニコは羽ばたくことをやめない。猛スピードで住み家に向かう。

「……あと僅かだ。カル、しっかり捕まっとけ！」

ニコはフンツと鼻息も荒く、痛む筋肉に鞭をふるい、激しく動かし、バサリと一振りするたびに、黒く艶めいた羽が霧を切り舞う。

下肢につく擦った感触の下、脈打つ鼓動が。

痛い、と。

訴えている。

カルにはわかつている。

だが、ニコはこのまま運ぶ気だ。どんなにカルが提案したところで、変えはしないだろう。

あたしのせいだ。

「ニコ」

んあ、と少し間延びした声を出し、ニコが首を傾ける。

「ごめんなさい」

行き辺りばったり、ではないが計画は多少雑だった。実際蓋を開けてみれば、こんな陳腐な仕事運びで。時間が足りなかった、というのはい訳にはならない。

カラス達に伝えておくべきだったのだ。

それが恥ずかしいことでも。

仕方なく協力してくれているニコに迷惑をかけてしまった。  
涙が滲む。

ぐいっと袖口で拭うと、黒い仕事着に鈍く光る銀の跡がついた。

泣くのはあと。自業自得なんだから。

「ニコ！ あと少しだから！ 頑張つて！」

カルはなるべくカラス達に体重がかかるように、ぐいっとロープを引っ張った。気休めかもしれないが、その方が一時的にもニコが楽になるのではないか、と思った。

四十メートル。

三十メートル。

二十メートル。

十、九、八、七、六、五、四、三、二、一、今だ！

「うわあああつ！」

カラスと自分を繋ぐロープを投げ捨て、ザーンの背を乱暴に掴み、空を跳ぶ。

狙いを外せば再びニコに世話をかけてしまう。

だから、慎重に。

一発で成功するように。

ゴツツ！

「あああああつ！」

悲鳴と共に床に叩き付けられる　ザーン。

脇でカルはしっかりと受け身を取り、スックと立ち上がる。

背後でうめく彼を放って、今しがた飛込んだ窓に駆け寄った。

「ニコ！？」

一瞬、嫌な考えが頭をよぎる。

階下を勢いよく望めば、目指す黒い生き物はいなかった。

「どこに」

（上です！）

不意に声がした。バサバサと沢山の羽音をたてて、カラス達が力

ルを見つめた。

カルは窓から身を乗り出して屋上を見やる。

「見えない！」

踵を返し、扉を抜けて、屋上へと急ぐ。

ニコ！

階段を駆け上がった。気をとられたせいか、うまく呼吸も出来ず、息があがる。

たかが一階分を駆けただけで、肺が爆発したかのように熱い。

「ニコ！？」

名を叫びながら屋上への扉を開ければ、真ん中にニコが横たわって 否、潰れていた。

「ニコッ！」

慌てて駆け寄り、膝がすりむけるのも構わず、側に座り込む。

「カルウ……バテたよ、おりゃあ」

「ニコ……ニコ……ごめ、ごめんね」

拭った涙がまた溢れる。自業自得なのだから、泣くことは自分を肯定しているようで嫌だった。それを止めようと、鼻をすするが、涙はとめどなく溢れ、屋上の床に落ちた。

「カル、泣くなよお？ おりゃ、まだ生きてるからさ？ 泣くな  
って」

しゃくりをあげて、首を振る。

「おい？ カルよお……」

横たわったまま、ニコは首を巡らした。

「ったく。おいっ、その……なんだっけ？ ザーン？ まあいいや。その王弟！ カルを慰めろ」

呼ばれたザーンは、オロオロと扉口で迷ったあと、近寄ってきて、また迷う。そんな彼に舌打ちし、ニコは声をあげた。

「おいおい！ 泣いてる女にはぎゅって抱き締めてやるのが普通だろー！？ いつもならおりゃ、人になんか譲らないけどもな。今日は別だ」

特別に許可をやる、と偉そうに呟いた。  
言われて抱き締めようとザーンがカルを見たときには、ニコの言葉に驚いたおかげで泣きやんでいたけれど。

「とにかくニコを部屋へ」

首を掴んで引つ張りあげて、胸まで持ち上げる。が、重すぎる。

「……動くわけない、か」

ちよつと待たなきゃかな、と呟いて、カルは溜め息をついた。  
無理に引つ張ればニコを傷付けかねない。ザーンに手伝ってもらったとしても、上手く運ぶ自信はない。

「……ニコ。平気？」

聞けば、クアツと鳴く。だが、カルにはわかる。

「ちよつと筋がいったね……」

翼のつけ根をゆつくりと撫でて、ニコのそばに座り込んだ。

「ごめんね」

カルが再び謝る。

「……一回でいいぞ。おりゃ、二度も三度も聞きたかねえ」

ニコがぶつきらばうに言う。

それは、気にするな、と言ってくれているようで。

カルは一層いたたまれなくなる。

「すまない」

ザーンがカルの肩に大きな手を置いた。

振り返るとザーンも神妙な顔をしていた。

「大丈夫か……？」

カルがうつ向くと、ザーンが小さく溜め息をついた。そのままカルの隣、ニコのそばに膝をつく。

「ニコ。……カルも。ありがとう。私を、盗み出してくれて」

カルが座つても頭半分高いザーンを見上げる。ニコも首を巡らし彼を見た。

「私は、二人のお陰で諦めていた自由を手にいれた。外の世界に出



てこれた　感謝する」

ザーンがニコを撫でた。

一瞬、緊張でもするように首筋の羽毛が立つ。

「しばらく、厄介になる。だが、必ず、自分に合った仕事を見付ける。それが　」

彼がニコからカルへ視線を転じた。紫がかった黒曜石が鈍く艶めく。

「それが、二人と同じなら嬉しい」

カルは言葉につまった。

あれほど言ったのに。

塔の隠し階段で、散々諭したにも関わらず、まだザーンは夢を見ていた。

……盗賊なんて、それ以外方法がない人がやるものよ。

カルにも、理由がある。

闇も光も、全てを視ることが可能な　。

突如、バサリと羽音がして、カルはそこから戻される。

目を転じれば、ニコがいない。

「ニコ、ニコ!？」

空を見上げれば、霧のなかに黒く羽ばたく姿がある。

「ニコ!」

そのまま、スツと滑空し窓へ入る姿を確認する。慌てて階段を駆け降り、自室へ飛込んだ。

いつもの長椅子にニコはいた。

「よお」

「よお、じゃないよ」

カルは溜め息をつく。そのまま、応接用の長椅子に座った。

ザーンが追うように部屋に飛込む。

それをニコは見て、話しかける。

「俺はニコ。古の鳥。カルの相棒だ」

威圧するようにザーンを見つめる。

「おりゃあ、貴様に用はない。住み家が見付かったなら、すぐ出ていけ。それが貴様にとつても 最善だ」

ザーンはしかしニコに負けなかった。

同じように睨み返す。

「その提案を飲む前に、私には名がある ザーンと呼べ」

「はっ！ ふざけるなよ？ おいつカル。こいつ今すぐ塔に戻してこようぜ」

「こいつじゃなくて私はザンだ」

「あほだな。カル、やっぱ戻すんじゃなく捨ててこようぜ」

ザーンが横を向いてぼそりと呟いた。

「……食ってやりたい」

「いい度胸だな。おいつカル！ そいつ、ダダイに押し付けてやれよ」

カルも溜め息をついた。二人を放って、窓に近付く。

窓の外には、まだ嘴に黒いロープをくわえたままのカラス達がいるた。

「みんな、ごめんね！ ……ロープ回収するから屋上に来て」

争う二人を尻目に屋上へ行くと、すでにカラス達が待っていて、カルは微笑んだ。

「みんな、協力してくれてありがとう」

カルが伝えれば、カラス達は口々にクアツと鳴き、リーダーだと思われるカラスが代表して口を開く。

（……すまなかった。まさか、貴女があれほど重いとは思ってもみなかったのだ）

カルは自嘲気味に笑う。

「仕方ないわ。言わなかったのはあたしだし……今のあたしは前と全く違ってるから だから探しているのよ」

（その話は耳にしていた。我々も失念していたのだ）

昔、カルはニコの背に乗らずに動物に力を借りてよく空を飛んだ。考えてみれば、あの頃の自分は羽のように軽かったのだ。

（すまなかったな、上手く運べなくて。報酬はいらんよ）

「そういうわけには――」

（いや、もっとこちらがしつかりしていれば良かったのだ。仲間と話しあったが、そういうことで皆、納得している。だから、いらぬ）  
そう、とやりきれない気持ちでカルが呟く。

（だが　また何かあったら声をかけてくれ。喜んで協力する）

言い終わるか終わらないかで仲間達は飛び立つ。それを見上げ、同じようにリーダーも飛び上がり、霧の中に消えた。

それを目で追ってから、カルは階下に降りた。

部屋では二人が耳を覆う子供の喧嘩が続いていた。

言い争いは朝までやまなかった。

\* \* \* \*

太陽がのぼり霧が消える頃、《月の塔》に驚愕が走った。

「王弟が！　ユーガウド殿下がつ！」

塔に入った衛士が、ぐらりと揺れた。

窓の側、冷たい床に横たわる姿があった。その顔を確認して、一人の衛士が王の間へと急ぐ。

緊急事態を告げ、王に額付くこともせず、それを口にする。

「失礼します！　只今、王弟ユーガウド・ジン・トルディキア殿下がみまかられていることを発見致しました！」

## 10・繋ぐ真実と過去！？

同じ頃、寝室から出てきたカルは部屋でまだ二人が言い争いを続けていたことに溜め息をついた。

ただし、二人とも声が弱々しい。

片方は目の下にクマが出来ている。もう片方は羽が萎れたようになつていたが、それでもまだ言い合っていた。

あほ、だとか、唐揚げ、だとかを背後に聞きながら、カルは寝起きのままの姿で窓から王宮を望む。

「今頃、大騒ぎかな？」

その声でニコとザーンがカルに気付く。

「おっす、カル」

「おはよう、カル」

「おはよう、二人とも」

ニコが聞く。

「何を見てるんだ？」

「ん、王宮！ 今頃、きつと大騒ぎ」

ケラケラと笑ってカルは王宮を指差した。それを見て、ザーンがオロオロとする。

「どうするんだ！？ 絶対、バレている」

「心配ないわ」

カルは寝室にとって返すと昨日の服から例の小瓶を取り出し、とつて返す。

「コレ。特殊な幻覚剤よ。見た人が最初に思い込んだ相手の顔に見せる、本当に特殊なもの」

「それを？」

「そっ！ あなたの顔型に振りかけておいたの！ だから大丈夫。」

今頃はきつとあんたが死んだと思われているんじゃない？　だから大丈夫　心配ないわ」

「おいっ！」

ザーンは顔だけを出して、カルを睨んだ。

「なんで私がこんな汚い部屋に入らなければいけないんだ」

汚いという単語に少しだけ腹がたったが、時間がない。仕方がないから飲み込んだ。

金庫から額飾りを取り出す。薄暗い部屋のなかで、それは明るい輝きを放つ。

「今からこれの依頼人が来るんだから、そこでおとなしくしてて！　何も触るな、見るな、聞くな、音を立てるな、息もするな」

「息もか……」

「なあ、こんな奴、追い出しちまえよう」

定位置のニコが、欠伸を噛み殺しながら呟いた。

呟きが聞こえたらしいザーンが、端正な顔を歪ませて意地悪く笑う。

「……鳥の焼き鳥って淡白で旨いらしいね」

「カル、俺、喰われちまうよう」

部屋から出てきたザーンがギリギリとニコに近寄る。

そんな一人と一匹の様子を見て、溜め息を付き、声を張り上げた。「だから早く入れ！　ニコも、いつも通り隠れてて」

「わかつてるよう。おりゃ、いつも通りの衝立の影。その邪魔物も早く消えるよな」

しぶしぶだがザーンも奥の部屋に入り、ニコも視界から消える。

あの日から一日たった。ザーンとニコは悪友と化し、カルは逆に頭を痛めていたが、今から依頼人がやってくる。

鏡を覗き込むと、年齢は二十歳前後に見える女がいた。やや跳ねてしまった毛先を整え、カルは呟く。

「……そろそろかな」

同時に扉がノックされ、声が向こうから響く。

「ダダイです。入りますよ」

声は仲介屋だった。時計を確認すれば、まさに時間通りだ。

「どうぞ。依頼人は？」

「一緒にいます」

扉はぎいっと錆びた音をたてて開いた。

手前にダダイ、いつもの仲介屋だ。その後ろに依頼人。

「こんばんは、どうぞ椅子にお座りになって。目隠しは外していただいて結構です」

この場所を知られない為に、依頼人が来る時は目隠しをしてもらっている。今回に限っては、一度ここへ出入りしている相手なので必要ないかもしれないが。依頼人はゆっくりと目隠しを外した。黒い瞳が凄烈な光を宿していた。

依頼人は促された通り長椅子に座った。それを確認してカルも正面に座る。

「……依頼したものは？」

「ここに」

カシヤンと繊細な音をたてて、額飾りは間のテーブルに置かれた。依頼人はささず手を伸ばす。

しかしカルは素早くそれを引っ込めた。

「お渡しする前によろしいですか。私には不に落ちないことがあります。聞いても？」

そこで入ってから気配を消していたダダイが慌てた。

「カルさん！ 詮索はいけません。仲介時に申し上げたでしょうっ！」

依頼人はそれを手だけで制す。

「何だね？」

本当に聞きたいことは声にならない。

ここでは、ダダイのいる前では聞けないわ……。

それに聞きたいことはひとつではなかった。

カルは一瞬、考え込む。

効果的な質問が必要だ。確実に答えてもらうために。

「……《月の塔》はどう考えても、この額飾りを置くのに適当な場所とは思えません。何故あの場所を指定されたんですか？」

ザーンが頂上階にいた理由。

隠し階段の存在を知っていなければ開くことは出来ないだろう。

いくらザーンが王族だからと言っても《月の塔》はそもそも高貴な人物や闇から闇に葬るべき人物を幽閉するための優美だが堅固な牢だ。そこに閉じ込められた本人が、いくら鍵がかかっていたとしても隠し階段を知っていたとは思えない。

だが、依頼人は口を開かない。眉間に皺を寄せて考え込んでしまった。

「お答えいただけませんか？」

再び同じ質問に依頼人はカルを見た。

「それは」

「私の為だろう？」

奥の扉が開いた。ザーンの姿を認め、男の飄々とした気配が一瞬乱れる。

「あんた何で出てきてるの！？ 戻って！」

「カルさんこの方誰ですかっ！？」

カルとダダイは同時に叫ぶ。さして広くもない室内に共鳴し、その為カルがダダイの言葉を理解出来たのは数瞬後のこと。

そんな二人をちらつと横目で見て、ザーンは依頼人をじっと見つめた。

その口が紡いだ言葉は、カルを驚愕させるには十分だった。

「こんな所で何してるんだ 兄上」

## 11・揺らく思い出!?

「……………は?」

男もザンを見つめていた。深い、底知れない瞳で。

「この人は……否、この方はトルディキア現国王。ヨルク・シーム・トルディキア、私の異母兄だ」

「トルディキア……国王……」

カルは呆然と呟く。そんな人がなぜここに? 思考回路は一時的に停止した。

「私のため、なんだろう?」

ザーンが依頼人、いやトルディキア国王に訊ねる。だが、王は目を閉じたまま答えようとしない。

「ザーンのため?」

ようやく回路が復活したカルがむしろザーンに聞き返す。その耳慣れぬ音に王は目を開けて正面のカルを見た。

「ザーン? ユーガウドのことか?」

「うん……じゃないや、はい。申し訳ないのですが勝手に改名させていただきました。今後ユーガウドの名を使うわけにはいかな」  
「かつて」

カルの言葉を遮り、王は意味ありげに衝立を見ると一度口を閉じた。

「……………何?」

カルは怪訝そうに王の視線を追う。

「かつてドウルスグイで使われていた言語だな? 成る程、《夜明け》か」

「……………王はドウルスグイをご存知か?」



知らず知らずに険のある表情に変わった自分を怪訝そうに見つめるダダイに気づかないまま、カルは低く問うた。

「それこそ依頼には関係ないことだ。……余が知っていることは遙か昔にドウルスグイと呼ばれる国が在ったことだけだ。正反対に位置しているトルディキアにも文献は残っているのだよ」

「王は」

「陛下もカルさんも何の話をしているんです……？」

ダダイが首を捻っている。優男風の彼だが仲介屋だけではなく情報屋も兼ねている稀な相手ので、カルは話題を引っ込めた。ダダイの手に入る情報と今夜の会話を繋ぎ合わせられでもしたら大変だ。

「……で、ザーンのためなんですか！？」

「それは否、だ」

不自然な話題転換にも王は自然に反応してくれる。

「ザーンのためかと聞かれたら、余は違うと答えるぞ」

「では何故なんです！？」

王は顔をしかめ、傍らのダダイに頷いて見せた。

「ダダイ君、外してくれ。申し訳ないが君に聞かせるのは少々辛い。身内の恥だからな」

「……では扉の外にありますので、終わったらお呼び下さい」

「すまないな」

立ち上がったダダイは扉のそばで軽く笑む。

「お気になさらずに。報酬以上の情報をすでに頂いておりますので」

ボタン、と音を立て扉が閉まると、王は苦笑した。

「彼は若いのに一流だという話だったな。余は……私は過分に情報を口にしてしまったようだ」

カルは会話を反芻し溜め息を吐いた。どうやら彼の言葉から考えると、話題を切り上げるのは遅かったらしい。

王もまた、ふっ　と息を吐くと、顎を撫で話し出した。

「君はまだ生まれていないだろう。二十三年前、私が十四のことだ。

私の母ミネルバが死に、父王は新たに后をめとった。一年後、私は弟が出来た」

カルは反射的にザーンを見やるが、王は淡々と過去を告げる。ザーンは、自らのことだというのに興味を引かれた様子はない。

「王妃の父親、つまりユーガウドの祖父は、当時王太子であった私を廃し、ユーガウドを次の王にと目論んだ。しかし、再三の暗殺は失敗した」

現在、一般庶民であるカルには縁のない話である。上が誰であろうと庶民の生活は変わらない。

「王妃ともども有罪、処刑。今から十年前の話だ。だが、ユーガウドは王家の血族。私に万一のことがあればと処刑は免れたものの、生涯幽閉となった」

「それが《月の塔》……」

ザーンは黙ったまま聞いている。先ほどまでの表情が抜け落ちた彼ではなく、少しだけ泣きそうにも見えて、カルはどうしていいかわからなくなる。

「トルディキアには今王太子がいる。私の子だ。……つまり、保険はいらなくなった。今後の後継者争いを避けるために、ユーガウドは内密に処刑されることが決定した」

「処刑!？」

「そもそも執行猶予という形だったのだよ。予定は明日だ」

王はザーンを見た。ザーンも王を見る。二人の視線が交錯する。

「十日前、突然兄上は会いに来られた。私がああ塔に入れられて暫くは顔を見せてくれていたのだが、ここ数年なんの音沙汰もなかったのに。正直、戸惑った」

フツと王が微笑した。

「お前は呆然としていたな」

「それは……もう誰も私のことを覚えていないと思っていた、から」  
「……忘れたことはなかった」

一瞬だけ、優しさが声に混じる。だが、それきり王はまた淡々と話した。

「処刑の期日が決まって、私は隠し階段から《月の塔》に入り込んだ。ユーガウドに必要な情報を与えるために」

「……《アカツキ》のことですね？」

あの最初の日、ザーンがカルの名を知っていた理由。

依頼人なら当然カルの名を知っているだろう。

それにカルの高所に入り込む術はやはり王に気付かれていた。王はニコを見ているのだから。

「塔に登った私は、ユーガウドに一枚の紙切れを渡した」

「……？　口で伝えれば良かったのでは？」

重大な証拠を残す行為である。万が一、それを見つけられれば計画の遂行は困難だ。

「声はかけなかったからな」

「どうして!？」

カルは身を乗り出して思わず大声を出した。

「必要性を感じなかった」

叫びに近い声に驚くことなく、王はそっけなく応じる。

「つ、冷たいんじゃないの!？　ひどいじゃない!」

数年ぶりに再会した弟に一言も話さず、なんてカルには考えられない。目の前の男が王ということも忘れて、怒鳴りつけた。

「カル!　よせっ!」

ザーンが止めた。それ以上は、と首を振る。

「書き付けには私の処刑される日時と隠し階段を開ける方法、それに兄上の指示が記されていた。指示に従い、私は塔の最上階で待っていた　赤い宝石のついた金の額飾りを持ち込んで」

「……つまり依頼品は最初からあそこにあったわけじゃないのね？」

「衛士のいない時間は額飾りを大切に持って最上階に行った。それ

がたった一つの、兄上からの指示だったからだ」

ザーンは王に手の届く場所まで近寄る。握りしめた掌が小刻みに震えていた。

「私は毎日、額飾りを持つて最上階に行った。兄上は何のために私のところへ来たのか、それだけを考えていた　カル、その額飾りを渡してくれないか？」

渋々カルは引つ込めた額飾りをザーンに渡した。

ザーンは掌にそれをのせるとうつ向く。闇色の髪に顔が覆われ、その表情はわからない。

「兄上の意図は読めなかった。それだけを考えて、ただ待っていた」身動き一つせずに、ザーンはふと顔を上げた。

「カルが迎えに来る」

「えっ？」

真摯な眼差しは深く、カルを真っ直ぐに見つめた。

「兄上の指示の最後に書かれていた一言だ。それが誰なのか、一体何者なのか、私には全くわからなかったが……あの日、あの瞬間に、君を見て兄上の考えを理解した」

ザーンは王にさらに一歩近寄ると、ゆっくりとその手を伸ばした。

「私は知らぬ。そのようなつもりで依頼したわけではない。依頼品を渡してもらいたい」

王は弟を見ることなく、カルを威圧した。

「さあ、早く。私は戻らねばならん」

「えっと、少し二人で話でも……」

「必要ない」

「でもっ！」

「……いいんだ。兄上、ミネルバ様の額飾りをお返しします」

ザーンは王に美しい宝を差し出した。

「確かに受け取った。報酬はすでに仲介屋に渡してあるから後で受

「取るが良からう」

未練を一切感じさせず、振り返りもせず王は扉へ向かう。開けた扉の先でダダイが微笑んでいた。

「陛下の依頼は成就されたようですね。カルさん、後でまた来ます。聞きたいこともあるので、では」

王が扉から消える寸前、ザーンが呟いた。

「……ありがとう、兄上」

「何あれ！ いいの！？」

カルはザーンの胸ぐらを掴み、勢いよく揺さぶる。少し首が閉まったらしい。げげほと咳をしながらザーンは微笑した。

「いいんだ」

まだどこか納得のいかないカルは、すわった目で彼を見つめる。

「あれはミネルベ様の額飾り、兄上のお母上様のつけていらしたものだ。兄上が昔から、ひどく大切にしている肌身離さず持っていたことを私は知っている。それを預けてくれた」

ザーンは王の座っていた応接ソファを見つめ、晴れやかに笑った。

「そっという人だ！」

## 12・情報と過去の一片!? (前書き)

作者はここから第二章、のように考えています。  
遅筆ですが、よろしくお願いいたします。

## 12・情報と過去の一片！？

「やっと居場所がわかったのに……」

闇を纏ったかのような長いローブをすっぱり頭から被った華奢な姿。

白金の月さえぼんやりとした霧煙る夜だというのに、本来闇に紛れる黒い姿が微かに輝いている。広がった袖から覗く手まで漆黒だ。

「その身を我に委ねよ、我はそれで安らかに眠る。奪うは両手の女王、架かる月は届かぬほど高い」

低く唸るように呟かれた詩。

「最初の陽光を稜線が遮り、闇は濃く長く、我が掌の中に」

霧を弾くように風が吹いた。その強い勢いにフードが小さな頭部から外れ、絹糸のように艶めく黒い髪が天へと翻る。

人影は風の出所を探すかのように顎をあげた。眼窩に収まる黒々とした瞳以上に目を引くのは 黒檀よりもなお黒い、漆黒の肌。

「私の呼び声は夜の隅々まで届く筈」

確信に満ちた声。

それだけが自らを沈黙させる唯一の手段。

\* \* \* \*

冬至まで一週間を切った。

王の依頼も無事こなした翌日のことだ。

白いローブを纏った青年 《アカツキ》懇意の仲介屋兼情報屋  
ダダイは、カルの部屋で真っ直ぐに指を突き出していた。それは微かに震えているが、怒り故かは定かではない。

「ダダイ？ あの」

「あの、じゃありません！ 誰ですか、この人は！？」

鋭い声と共に突き付けられた指を見つめ、ザーンはきょとんとした。若干寄り目になっている。

「うん、あのね……だから」

「この間までは居ませんでしたよね！？　っというか例の薬と粘土を渡しに来たときだって居ませんでしたよ！　一体、誰なんですっ！」

……しまった。やっぱりダダイには説明しておくんだった。

カルは首を竦める。

冬至まで間がないので、出来れば今日の内にダダイにザーンを押し付け　預けてしまいたかったのだが、この剣幕だ。一体全体何にそんなに憤っているのかカルには見当がつかない。

「まさかとは思っていたんですが……昨日陛下のことを兄と呼んでいましたよね？　カルさん、もしかして」

「気のせいじゃない？」

とりあえず空つとぼけてみたものの、カルもそれでダダイを誤魔化せるとは思っていない。

再三言うが、彼は優秀なのだ。些細な会話の端々からカルには思ってもよらない情報を導き出す。

カルやニコのこと、やらなければならぬことをどこまで把握しているのか　それについて自ら語る気はないが、カルだけで情報を得るのは効率が悪い。ただし、小出しにしている断片から何を推測されているのか、どこまで裏付けを取っているのか。

上目遣いでダダイを見つめると、彼はひとつ溜め息をついた。

「……僕のところには一体一日何件の情報が入ってくると思ってるんですか？　ついでに言う情報の対象が人間の場合、身長体重足の大きさは勿論のこと、体にあるほくろの数まで手に入れようと思え



ば手に入るんですよ!？」

思い余ってニコを見れば、衝立の陰でニヤニヤと笑っている。

「いや、その、ダダイにはちゃんと、その……」

「僕が情報屋だからって見くびらないで欲しいんですが。僕は情報屋である前にカルさんの友人です!」

一層首を竦めて見せたカルが、ごめん、と呟いた。

「ここトルディキアの王弟殿下、ですよね?」

「……はい」

「昨日の朝見つかったのは僕が用意した遺体ですね?」

「……はい、その通りです」

カルが溜め息を吐きながら認めるとダダイは破顔した。元々優しい顔立ちをしているが、笑うと榛色をした瞳が一層柔らかくなる。

「良かった。いや、良くないけれど 殿下、こちらをお納め下さい」

姿勢を正したダダイは重そうに抱えてきたトランクと、布でぐるぐるに巻かれた長い荷物をザーンに渡した。

「これは……?」

「依頼人より預かっておりました。僕は仲介屋ですので」

不審そうにザーンが広げたトランクの中身にカルは軽く目を見張った。

何だかんだ言っても優しいじゃない。

ざっと見たところは役立つものばかりだ。当座の生活費、下着や服、貴金属まで入っている。だが、それらよりザーンの意識を捕らえたのは……一振りの剣。

「覚えていてくれたのだな……」

感無量といった風に囁いたザーンは、長い剣を片手で持ち上げると、すらりと無骨な鞘から抜いた。

柄も鞘も街の武器屋で売っていきそうな造りだが、現れた両刃の刀身は目を引く素晴らしいものだった。赤金だ。

「綺麗っ!」

カルが驚嘆の声をあげる。

「昔、兄を守る騎士になると言った子供に感動した父親が将来のためにと作らせた剣らしいですよ。ただ子供は大人になる前に剣を握れなくなっただけですが」

「父上に頂いた私の剣だ……兄上がこれを私に……」

ザーンは無造作に剣を構えると、斜め上に向かって振り抜いた。ヒュンツ　と風を斬った長剣を惚れ惚れと見上げる。

「昔は重くて持てなかったのに……」

二度、三度と風を切って、ザーンは瞳を輝かせた。余程嬉しいのか、口元にはかれた笑みは喜びに溢れている。

歡喜と剣術の気合いに誘われたのか、衝立の陰からニコが姿を現した。人間のように眉間にしわを寄せ、鋭い瞳で見ている。

「ニコ？　どうしたの？」

気付いたカルがそう問うが、ニコは返事をせずにまた衝立の向こうに戻るうとした。

「　会いたくなったら夜に飛んでこい、が伝言です」

「えー！？」

絶妙のタイミングで告げられた言葉に、思わず振り返ったのかニコは羽ばたいた。同時に声を上げたカルはこめかみを押さえると脱力する。

「……鳥使いの荒い王だなあ。勘弁しろよな」

呆れたニコの言葉にダダイはクスリ、と笑う。

「それから……こちらが《アカツキ》の報酬です」

ガチャチャ、と硬い音がする袋が三つ応接テーブルに置かれた。

そのひとつの口を縛るひもを解くと、中には燦然と輝く金貨。

「しめて六百デイル。確認して下さいな」

「……めんどくさいよ。あんたのこと信用してるから。ちゃんと数えてくれてるんでしょ？」

目算で枚数をほぼ正確に把握したカルがぼやく。

「ええまあちゃんと六百ありますけど。いつも通り、銀貨と銅貨もありますから」

減らず口を叩くカルにダダイは苦笑しながら、残り二つの袋も開けて見せた。

「手際いいね。さて……あたしは幾ら払えばいいの？」

「何故カルが代金を払うんだ？」

剣を嬉しそうに振るっていたザーンは、革で出来た鞘に戻しながら口を開く。

「何故って」

「僕が情報屋だからですよ。だから、殿下は席を外して下さい」

「え？」

「そうね。外して、ザーン」

カルは昨日も彼を押し込めた部屋を指差した。

ダダイとカルの視線を敏感に感じ、ザーンはすこすこと引つ込もうと肩を落とす。

「待てよう、カル。ザーンにも聞いてもらえ」

「ニコ!? 何言って」

「いいから。俺を信じろよう」

「では 五ディル頂きますからね。もちろん友人割引です」

ダダイは銅貨五枚を手に取ると、一枚の紙をテーブルに置いた。

「トルディキアから東側の川を越えた先、隣国ヨルンガムの外れの丘です」

紙に書かれていたのは地図だ。

「……この場所が何なのだ？」

ザーンが首を傾げる。

むつつりとしたままのカルではなく、答えたのは軽い口調のダダイだった。

「冬至の日、最初に夜が始まる神殿ですよ」

「冬至に？」

「何にも知らないんですね、殿下」

含み笑いのダダイに口を尖らせたザーンの肩を叩き、カルは眉根を寄せる。

「ザーンをからかうのは止めて。ダダイだって知らないでしょ？」

カルは食い入るように地図を見つめると、少しだけ躊躇いながらも、ダダイを見上げた。

「ダダイ、あなた一体どこまで気付いているの？」

「……どこまで、とは？」

目を細めて首を傾げたダダイを睨め付け、カルは机を激しく叩いた。

「とばけないでよっ！ あたしはサミュン神殿のじゃない近場の神殿を聞いただけよ！？」 冬至なんて一言も言っていないわ！」

「そうか……君のそのローブは神官が身に付けているものだ」

不意にザーンは表情を明るくさせた。どうやらずっと気になっていたらしく、しきりにうんうんと頷いている。

「白地にグリーンの三本ラインなものな。大地と空と命を示すって昔聞いたことが」

「ご指摘の通り、僕はサミュン神官です。申し遅れましたね。ダダイ・ロウ・グリントスです。どうぞダダイと気安く呼び下さい」

ふわりと風を孕むが如くにこやかに笑んだその顔に、一切の邪気はない。手に銅貨を数枚持っていることを除けば、完璧な神の僕の笑みだ。

「……神官が裏稼業やってんじゃないんだよ」

「賢者が盗賊をすることと何か違いますか？ それに神官にはたくさん情報が舞い込みますからね。人々の望みも聞きやすいです。情報も仲介も仕事は引く手あまたです」

脱力感を覚えるかのようにニコが呟くと、いつそ清々しい程の明るい声でダダイが答える。

「サミュンが聞いたら嘆くわ絶対」

「神官は仕事ではありません。僕の生き方ですよ……カルさんも似たような立場でしょう？」

含み笑いを残して席を立つたダダイを止めることはカルにもニコにもザーンにも不可能だった。

\* \* \* \* \*

「……君は一体どこにいるのかい？」

不意に聞こえた言葉をそれ以上耳にしたくなくて、カルはそっと布団を被った。

まだ戻れないのよ。だってまだ……。

言い訳だとわかつている。それでも、心の中で幾度となく弁解を口にして、カルは深い眠りに落ちていく。

どこかで、甲高い鳴き声が聞こえた気がした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8969e/>

---

職業は盗賊、相棒は誰！？

2010年10月10日00時21分発行